



A.C.E

ながたかずひさ



Miracles!

Episode 9

- A • C • E -

1ST

平野  
エレナ  
ELENA  
8PF

吹田千里  
CHEETAH  
8K

西条  
明日葉  
17PF

佳吉古都  
COTTON  
12PF  
Manager

天王寺ありす  
ALICE  
21PF

此花可憐  
KALLEN  
9FW

守口忍  
SHINOBU  
1R

マキ・  
180・  
キリダ  
MAKILPK  
19FW

3RD

森之宮胡桃  
COO  
14FW

八尾由美子  
YUUME  
16MF

梅田もも  
MOMO  
8PF

2ND

美原  
はなこ  
HANAKO  
8PF

天満蘭  
LAN  
8PF

堺愛  
LOVE  
11FW

和泉流ワ  
RENULT  
5PF

長居美緒  
MIO  
10MF

難波鳴海  
NANA  
7MF

■あらすじでござる

女子サッカークラブ「ミラクルズ」は、とある街の人気者。高校1年から3年までの一六人+マネージャーが、超色男（ただし自覚なし）コーチに率いられ、楽しく激しく恋に笑いに涙に人生にそしてサッカーに勤しんでおります。

ただいまの目標は、毎年お正月に行われる日本最大のオープン大会「クイーンズカップ」への出場、そして夢はどうか、優勝です！

はてさて今回は、どんな騒動が巻き起こりますことやら。

■目次

- 1 予兆
- 2 衝撃
- 3 兄貴
- 4 逆風
- 5 切り札
- 6 兄と妹？

【本日の主演】

此花可憐（このはな・かれん／カレ）FW9

ド単純でもそこが可愛い、憎めない暴れん坊。

ユース代表の逸材。エース・ストライカー。

【ミラクルズ・メンバー】

【1年生】

吹田千里（すいた・ちさと／チータ）GK20

ボーイッシュナンバー1元気も一番、いつもチームのムードメーカー。FW兼任の超反応GK。

平野エレーナ（ひらの・えれーな／エレ）MF8

日露ハーフの元フィギュアスケーター。物腰柔

らか、微笑み一杯。大型MF、中盤の働き蜂。

天王寺ありす（てんのうじ・ありす／あー）MF21

砂糖菓子少女っぽいが底の知れないキャパを

持つ天才少女。攻撃的MF、ファンタジスタ。

西九条明日葉（にしくじょう・あすは／はつぱ）D

F17

天下無敵のボケ倒せお嬢様。敵も味方も大混乱。

鉄壁のDF、右サイドバック。

住吉古都（すみよし・こと／ことん）Manager

ど派手な見た目に似合わず思慮深い、縁の下の力持ち。心配りのマネージャー。

【3年生】

梅田もも（うめだ・もも）DF4 3年

B三桁のだいまないとばでーを揺すぶりながらピッチを駆けるフェアプレー・DFリーダー。

森ノ宮胡桃（もりのみや・くるみ／くる）FW14

クールで捉えどころのない、けど特に何も考えてないネコ娘。高々度戦闘爆撃セクターFW。

八尾由美子（やお・ゆみこ／ユミ姉）MF16

頭脳明晰でも気さくな姉御。ガッツと肝つ玉は

天下一品。守備職人、MF・DF。

マキ・パメラ・キシワダ（まき・ぱめら・きしわ

だ／PK）MF19

ブラジル人日系4世留学生。誰にも止められない

いだんじりサンバ娘。トリックキーウイング。  
守口忍（もりぐち・しのぶ）G K I

時にカジュアル時に武人、麗しき見た目に騙されてはいけない。不屈の守護神。

〔2年生〕

長居美緒（ながい・みお／みー）M F 10 (c)

一見地味だが強く優しく頼もしい、ピッチ内外問わずの大黒柱。パーフェクトボランチ、キャプテン。

難波鳴海（なんば・なるみ／ナナ）M F 7

ユース代表を張るサツカー小娘。二四時間ギャグ・ドリブル。超絶テクニカル司令塔。

和泉流乃（いずみ・るの／るー）D F 5

センス抜群切れ味抜群、なんだかんだで頼りになるいい女。光速サイドアタッカー、副将。

天満蘭（てんま・らん）D F 3

天真爛漫豪放磊落、食いしん坊万歳なナチュラルガール。超攻撃的パワーフルリベロ。

美原はなこ（みはら・はなこ／はな）D F 2

神経質でもうるさくても、学年トップのど根性秀才、作戦参謀兼任。クレバーなスピードD F。

塚愛（さかい・あい／プリンセス）F W 11

無口ながら存在感抜群の超絶美少女。実は結構、お茶目。フィジカル自慢のパワーF W。

〔男性陣〕

大正太陽（たいしょう・たいよう）2年

高校生Jリーガー、大地とは古くからの親友。

美形だが多少女嫌い。

上町大地（うえまち・だいち）2年

超オットコマエ・ミラクルズ・コーチ。サッカー戦術と乙女心掌握の天才。

空堀三十六（からぼり・さとる）2年

冴える頭脳に軽い足腰、チームの盛り上げ役。チームプロデューサー、ナナと夫婦漫才。

千林哲哉（せんばやし・てつや）2年

応援団の明日を担う漢気あふれる好男子。豪放

磊落、情に厚い。声がでかい。

**高安和輝**（たかやす・かずてる）2年

放送部のしゃべってないとすぐしんじやう星人。かしましくチームとサポを盛り上げる。

# 1 予兆

サッカーは、点を獲り合うスポーツである。

そして点は、「ストライカー」と呼ばれる人種が、それを獲る。

——住吉古都は、一人でオロついていた。

コーチの機嫌が、悪い。

いつもは、その名のごとく優しく人当たりのいい上町大地コーチが、眉をひそめ三角の目をして、練習にいそしむチームメイトを見つめていた。

8対8ミニゲーム。ミラクルズの、いつもの練習風景。

「どこだろう……誰だろう……」

古都は、マネージャーの意地を賭けて——が半分、コーチが声をかける前に見

つけて誉められたいのが半分——目を皿にした。

が、それらしい気配はない。全員がいきいきと、そして真剣に戦っている。

選手総員十六名、フルチーム二つができないミラクルズの紅白戦は、工夫をこらして効率を求めた。今日はFW・攻撃的MFを中心にしたオフエンス・チームと、守備的MF・DFを中心にしたディフェンス・チームで戦っている。しかしこうなると守備側は分が悪い。やはり、ミラクルズは攻撃のチームである。

今まさに自陣右深くで流乃からボールを奪ったナナが、大きなサイドチェンジを試みる。アンブッシュ（待ち伏せ）、左に大きく開いた可憐。トラップ。

一呼吸。

ぶん、とDF明日葉の突っ込みを紙一重でかわして、クロスを上げる。明日葉、抜群の守備力を誇るが、物理的に間に合わない位置から早めのクロスを上げられては、防ぎようがない。

どんぴしゃりのタイミングで、胡桃が飛んだ。

1点である。

「……駄目だッ!!」

小さいが、短い絶叫に古都の肩が跳ねた。おそろおそろ、声を掛ける。

「……こ、こーち?」

「え?」

「……あ、いや……」

振り向いたコーチは、少し驚いたような顔をしていた。おそらくは本人も、自分の言葉に驚いたのだろう。古都は小さく勇気を出して、訊いた。

「……何が、いけませんか?」

「……」

大地は複雑な表情で即答せず、ピッチの動きに視線を戻した。もちろん、何事も無かったかのように、戦うみんながいる。意気上がる攻撃側、挽回に吼える、

守備側。

「……胡桃の頭に放り込んで1点、つていう安直なやり方は、強い相手には通用しないからね。そんなの何十回練習しても、あまり意味がない」

「嘘だ」

熱血そのものの普段とはあまりに違うその平たい声に、古都はそう直感した。

そもそも、それはミラクルズの大切な得点パターンの一つである。練習も散々やっている。チームでは天満蘭と並んで頑健そのもの、少々なことでは音をあげない元・中学日本一バスケット選手森之宮胡桃が、頭を押さえて涙目で訴えたほどだ。

「……このままだと、ばかになる」

慌てた大地が取った行動がまた、よくない。

「ごっつ、ごめんよ!!」

ちよつと、あんまりにも上手く行くからやりすぎちゃったね、ごめん、ごめん



だと明日葉ちゃんが間に合わないのは責めるわけにはいかないし、サイドチェンジを見てまつすぐゴールへ向かった胡桃さんの判断も良し、そのすぐ後ろをちやんとありすちやんが詰めているのもOK、そこへピンポイントの可憐ちゃんのクロスは、まるで本職が左MF……

あ……”

ひよつとすると。

それは、古都にも最近、なんとなく感じられていた違和感である。

しかし、これを「駄目だ」というのはどうだろう。

チームとしてはこれで上手く行ってる。何の問題もない。いや、このおかげで上手く行ってるとも言える。

それは、コーチらしくもない、精神論、あるいは「かくあるべし」論にすぎないのでは……

だからこそ、私には黙っているのだろうか。論理的なことではないから、話すべきことではないと。

少し、寂しい気もしたが、しかし個々の選手が問題を抱えれば、必ずと言っていいほど、たとえば話相手半分であつても相談してくれた大地コーチである。そのコーチが、黙っている。

そこには、それなりの理由があるような気がした。

“……ふう。”

……おまかせするしか、ないよね……”

ちらりと、コーチを見た。その視線を追う。やはりおそらく、間違いはない。いつの間にかまた、表情も、険しく曇っていた。

秋。いよいよ、予選が始まる。

ミラクルズ最大にして唯一の目標、それは、「クイーンズカップ制覇」である。一年一度、プロアマ問わずのオーブン大会。女子クラブチーム日本一決定戦。成り行き上高校の正式な部活動ではない彼女たちにとっては、たった一つの獲得可能なビッグタイトルである。

しかも、プロ・リーグがまだ男子ほど活発ではない女子では、国内最大のタイトルと言っても過言ではない。もちろんプロも含め、多くのチームがこのトーナメントに焦点を合わせていた。

最後の練習試合も終わった。あとは、本番が始まるのを待つばかりである。

高校最後の挑戦に賭ける三年生、前回以上の結果を、と静かに燃える二年生。彼女達に劣らず、初挑戦の一年生達も、テンションが上がっていた。

——練習のあと、その一年生六人揃って、いつも御用達のドーナツ屋さん。

会話をリードするのは、もしやもしやと大好きなオールドファッションをカッ

喰らいながらしゃべりまくる此花可憐。このはなかれんいつものことだが、必要以上に勢いがあ

る。

「……だからさー、あーはさー、もつともつと自由に動けばいいって思うわけ  
ね」

「でも、それはナナさんも言ってくさるんだけど、私もMFだから、守備」

「あーあーあー、要らない要らない。そもそも守備だったってあーんたじゃプレッ  
シャーのプの字の上の丸にもなんないじゃん」

「……うう……」

「……あ、ごめんあー」

あまりの言われように、「あー」こと天王寺てんのうじありすが落ち込んだ。半ば当たつてただけに、反論はできない。可憐いつもの喧嘩相手、吹田すいたちさと千里がたしなめる。

「いくらなんでもそりや言い過ぎだろ、可憐」

「ううん、事実……」

「ま、まあ、んなことも含めて、あたしやくー先輩の守備もあるし、あんたはさ、思い切つてさ、ゴール側だけ向いてればいーんじゃないのかな、って」

「前の練習試合の、可憐さんのクロスをありすさんがヘッド、あれなんか、二人のポジションチェンジが上手く行った例デスね」

平野エレナが、微笑みながら合いの手を入れた。穏和な彼女が口を開くと、空気が和らぐ。

「こそ。今日も同じパターンでくー先輩決めてくれたしね。あたし、左開き得意

だからさ、あーゆー時はあたしに任せてくれていーよ」

「でも」

ありすが小首を傾げた。

世の男性陣が見ればひっくり返らんばかりの愛狂おしい仕草だが、内容は、深い。

「……やっぱり、あれは、流れの中ではないと思うんだけど、あれが当たり前なのは、変なように思うよ」

「変？」

「可憐ちゃんが悪いんじゃないやなくて、私が悪くて、あそこは、私が左に開いて、可憐ちゃんがゴールに向かうべきんじゃないかな、って」

「まあ……だけどさ」

『誰かいなきや駄目じゃん』と言いかけて止めた。こういう場合、自分が張り出したから任せたのかもしれない。ありすはともかく、エレーナあたりはその辺よ

く気がつく。本番では、左サイドには流乃のオーバーラップもある。

「だって、可憐ちゃんはフォワードなんだもん。できるだけ、ゴールに近いところにいる方がいいよ」

「ん〜……もしやもしや」

ドーナツを手に、天井を向いて考えた。

ありすのいいいたいことはなんとなくわかるが、今これで上手く行ってる。誰がFWで誰がMF、そんなことはどうでもいいではないか。得点が、取れば。

「……う〜ん。」

わかるんだけど、あたしは、点は、チームで取ると思うんだ」

「うん。それはそうだと思う」

「だから、点を取りやすいように、点を取れるようにみんなが動けば、それでいいと思う。極端なことをいうと、もし、そっちの方が点が取れるなら、あたしが左のMFで、あーがFWでも、いーと思うんだ」

「それは違うよ」

彼女にしては厳しい声に、みんなが驚く。

だがありすはかまわず、続けた。

「……な、なに」

「可憐ちゃんは、ミラクルズの、『エースストライカー』だよ？」

その人が、居なくなったら困ります」

「いや……ま……ま……」

……そんなに、怒んなくても」

ぽりぽり。

『エースストライカー』。誉められて怒られて、少し照れ少しバツ悪く、可憐は頭を掻いた。そういう時の可憐のクセで、まるでイヌ科の子供が耳を掻く時のよ

うにくねくねと手首をひねる。

「カレ、あーはさ」

千里がフオローした。

あたしはGKだから細かいことはよくわかんないけど、ありすの言葉には賛成だ。

「……要するに、頼りにしてんだよ、あんたを」

「ありすちゃんだけじゃないよ。みんなそう」

いつもはおしゃべり好きの古都が、ようやく口を開いた。

だが、重い。

今日のあの、コーチの顔が脳裏をよぎる。

今ここで何か言うことが、はたしていいことなのか。あるいは、可憐のためになることを言えるのか。

迷った末、結局言葉は、そこで詰まった。

「……てへへ……なんか照れるな」

当の本人はブラツクのアメリカン・コーヒーで、口元を隠した。  
少し、場が静かになる。

可憐は、美形である。

ちよいつり目、琥珀のような透明感あるその瞳、真っ直ぐ上がる形良い眉、紡錘型の顎への破綻のない美しいライン、少し強い直毛を長く伸ばして、ポニーテールがよく似合う。

印象は子ギツネ。パラパラのそのポニーがまるで尻尾、犬歯が八重歯で、口を開けばきゅっ、きゅっとなってしまふところも、それっぽい。米俗語で「FOX Y」、つまり「ギツネのような」という単語には、「魅力的ないい女」という意味もある。まさに、言い得て妙。

もちろんミラクルズは美少女揃いだ、ありす・古都筆頭に、「可愛い」タイ

プが多く、一般的にいうところの「美人」タイプは案外少ない。あまりに整い過ぎて嘘っぽくさえある「プリンセス」堺愛を別格にすると、三年では守口忍、しかしこれは色素の薄い髪と薄赤い目がエキセントリックにすぎる。一年ではここでドーナツのストロベリーコート部分だけポリポリと剥いでは食べ剥いでは食べしている超絶お嬢様、西九条明日葉<sup>にしくじょうあすは</sup>。すこぶる端正だが、触れなば壊るる、という儂さがありすぎて、近寄りがたい印象が勝つ。あとは二年の戦う作戦参謀・美原はなこか。しかし、これも目鼻立ち抜群に美しいのだが、写真でも一目見れば「うわ、キツそう」と誰もが漏らすスパイクな印象があつて、万人向けとは言い難い。

だが「キツめマニア」にはそこそがたまらないらしく、「怒らりたい」「罵声を浴びたい」ぐらいなら理解できなくもないが、「背中に馬乗りになられたい」「平手でぶつて」「踏んで」と言い出す輩も居ては、人間の趣味趣向とは奥

が深いものだと痛感する。

それは余談。

そんな可憐がドーナツ・シヨップでコーヒークップを傾けると、それは、かなり絵になった。

本人は「バカだ」と自分でも認め、事実お勉強の成績はかなりいやむしろとことん悪いのだが、しかし、「自分がバカとわかってるバカ」は、ソクラテス先生のお言葉を借りれば「自分をバカとわかってないバカ」よりはバカ度が低く、なにより素直さ、謙虚さという可愛げがある。

逆にいえば、そこが、さつきからありすと議論になっているところだ。

エースストライカーに、そんなもの必要ない、とありすは言う。

「……ま、まあ……頑張るよ。」

とにかく、それしかないじゃん」

「……ん。そうだね」

明るく笑う可憐に、ありすもにこやかに同意した。それには異存がない。可憐がまた一つ、ドーナツを取った。

「あんまり食べると太るぜ」

「ナナさんみたいに、って？ 言いつけてやろ」

「コラー」

「……ん？」

千里をからかいながらパクついたドーナツが、なにかおかしい。見ると、半分  
にスライスしたように片側がボロボロに……ってこれは。

「あー！ はっば！」

お前またストロベリーコート剥いでそれだけ食べてるだろ!!」

「えー、ど、どうしてバレましたか、ちゃんと綺麗に剥がして残りは元の山に戻

しておいたのにー」

「戻ってるからバレてるの〜」

「そうデスよ、ちゃんと全部食べないと」

「えーん、だつてだつて、この苺のところが一番美味しいんですー」

「美味しいとこだけ喰えばいいつてもんじゃねえだろ!？」

「まあまあ、あたし、甘いのがあんまり好きじゃないし、いーよ、はっば。残り食べたげる」

「ほらー！ さすがはエースストライカーさんですー！

補欠の誰かさんとはえらい違いですー」

「ガッ……」

古都を除けば、一年は実に五人中四人がスターターを張っている。つまりリザーブは2nd GK、千里だけなのだが、そんなデリケートなことを本人の目の前でズケズケ言えるのは……明日葉の、アレだ。

千里も素直に、落ち込んだ。

「……補欠……つちゅやーそーなんだけどー……GKは他と違って戦術で変えるとかあんなないしー……忍様のが上手いのは確かだしー……」

「ち、ちーちゃん、落ち込まないでー!」

「そ、そうデス! 忍姉様は三年生でいらつしやいますから、来年は間違いない  
I s t G K デスよ!」

「エレ、それなんの慰めにもなっていない……」

「え!? そ、そデスカ!?」

「へへへ、だーいじょうぶだつて、ちー」

「あんだよ、余裕ぶちかましましやがつてエースストライカーさんよ」

「あなたが2、3点ミスつても、ウチのチームはちやーんとそれ以上点取れるからさつ」

「だから、んな事態はちつとも嬉しくないつてば」

「だーいじょーぶだいいじょーぶ。簡単にはそんな事態になんないから。

千里、補欠だから試合に出ないじゃん」

「んがー！ー！ー！ー！！ 大人しく聞いてりゃムチャクチャ言いやがってこのバカレー！ー！ー！！」

「きゃー！ー！！ 補欠さんがお怒りだー！ー！！」

「ちっ、ちく、ちくしょーッ！」

いつか、いつか大舞台でゼロ封して『神様仏様千里様』 って呼ばせてやるーッ！！」

「ひゃっひゃっひゃっひゃっひゃー、期待してるよ補欠さーん！」

「ちくしょバカにしゃがってちくしょーッ！！」

暴れる千里と可憐を見ながら、古都はなんとなく、大地の言葉と表情を思い出した。

「可憐ちゃん、優しすぎるんだ」

千里とのやりとりも、結局は自分がバカになることで冗談にして、明日葉も救っている。それはここでは素晴らしいことだったが、ピッチの上では、美徳とは言い切れない。まして。

『ウチのチームはちゃんとしてそれ以上点取れるから』

そこはそんな面倒なことを言わず、

『あたしが』

と言うべきでは。

「……こつとん」

「え？」

「今日は、静かだね。どうしたの？」

「ん、えつと……」

ありすに問われて、改めてみんなを見る。

ギヤーギヤーと喚き散らす二人、それに巻き込まれて青い目を白黒させているエレーナ、相変わらず次はチョコレートのコートを剥ぎにかかる明日葉……

いつもの光景だった。

いつだって、どんな困難だって、私達はなんとかしてきた。

きつと、こんども。

「……信じよう」

「え？」

「……うん、なんでも。」

さて、そろそろ行きましようか」

「……うん。」

……落ち着いたらね」

ありすが眉をひそめて舌を出した。

隣から、いつもの絶叫。

「ちー！ だからー！ オールドファッションはあたし専用なんだってばーっ  
!!」

「あんたその明日葉の残りがあんだろー!?」

「これはボランティアじゃん、ほんとはそっちが食べたいのー!!」

「だからそんなに喰っちゃ太るってー!」

「まあまあ君達落ち着きなさい、ですー」

「「そもそも貴様が悪い」」

「えー」

「カレ、その腕つかまえとけ！ この喰いさし、無理矢理ねじ込んでやる」

「うっし!」

「あー、あー、あー、ダメですー、ダメですううー」

「……。」

……なんだかすごくイケナイことをしてる気分になってきたよ？」

「……あ、あたしも」

「ダメですううううううう」

わいのわいの。

古都は目を細めて、その様子を見つめた。

というよりも。

八重歯を見せて笑いながら明日葉を羽交い締めになっている、エースストライカーを見ていた。

ss

クイーンズカップ。

ミラクルズは前年、キャプテン長居美緒ながいみお、ユース代表難波鳴海なんばなるみ（ナナ）を中心に本大会出場の栄冠をもぎ取った。強豪校でもない単なるクラブチームが本大会に出てきたということ、女子サッカー界的には随分な話題を呼んだ。しかもイレブンイレブンは現在の三年生二年生の丁度十一人であり、顧問もおらず用具係も自分達で兼任……その牧歌的な、ほのぼのとした姿は、見るものに大きな印象を与えた。戦いのスタイルもシンプルだ。難しいことは一切抜き、人に当たってボールを取って、ナナ、マキ、美緒あたりが個人技でなんとかした。磨き込まれたオフエンス・タクティクスも無ければ精密なディフェンス・システムも未整備、それで「予選突破」という結果を残したのだから、人々は驚いた。

そこに、上町大地が登場する。

彼は乞われてコーチに就任するや否や、大幅な改革を断行した。

より攻撃的によりシステマティックに、より意図を押しつけて戦う集団に……  
その改革の軸が、此花可憐である。

一目、ただものではないと感じた。

一瞬で全てを置き去りにする縦へのスピード、裏を取るタイミング、マークを剥がす技術、ドリブルの精度、止めるのではなく、次に繋がる位置へ弾くトラップ。当たり前のように両脚を同じように使いこなし、頭から飛び込むことを一ミリも恐れない。身体のキレ、ペナルティエリアでの落ち着き、スタミナ配分、プレー選択肢の幅の広さ、そして闘志。

九〇分、前しか向かない、終わらない闘志。

なにより……豪快そのもの、まさに魂が乗る、圧倒的なシューティング・パワー。そこに込められたもの、それは、「点を獲得」という強烈な、執念。

溢れんばかりの才能と、それを幼少のみぎりから鍛えに鍛え抜いた経験が、自

信という名の灼熱のオーラとなつて、その身にまとわれていた。

「本物だ」

電撃に打たれた。身が震える感動を覚えた。

聞けばユース代表だという。高校女子では最強を自他共に認める聖愛学園も、彼女に特進枠を用意したらしい。それを蹴つて、なぜこんな正規のサッカー部もない高校に、と問えば、無邪気な瞳で「たくさん点を獲りたいから」と言つた。

「……だから、どこでも良かったんです。サッカー、できれば。

ウチから近いし、なにより……このチームが、あつたし」

「しかし……聖愛にいた方が、点は獲れそうな気がするが……」

「一年からあそこでレギュラーになるのは、簡単じゃないです。

試合に出れないなんて、考えただけでもゾツとします。

それに……あそこの、なんて言うのかな、キツチリカツチリの……えと、ス

ステマ、セステマ」

「システマティック？」

「そうそれ。あれ、大変そうで……てへ」

聖愛の強さは、まさにそこだった。戦術と組織とオートマテイクリズムががんじがらめに選手を縛る。創造性や楽しさは少ない。その代わり、戦いぶりは厳格のように安定しきっており、負けない。例え華やかで無くとも、その骨太さ、力強さは、充分に人々の感動を呼んだ。

「ユースで、国見キャプテンが呆れたように言ったことあります。

『このチームは、決まり事少なくて、楽だね』

つて。あたし、約束事多くて泣きそうだったのに」

「はは……」

国見香織は、聖愛学園でも、ユース代表でも、FW9番を背負い、主将を務めるこの世代の大黒柱である。人柄実に誠実で己に厳しく仲間に優しく、チームの

尊敬を一身に集めている。ナナや可憐が、ホームに帰ってきてきても、つまり長居キヤプテンの元に居ても、わざわざ「国見」をつけてまで「キャプテン」と尊称するほど、皆の信頼を受けていた。

ちなみに、可憐はユースでは18を背負って彼女とコンビを組む。

勉強はできないが、可憐の戦術理解度はかなり高い。長年の経験と、サッカー・センスの良さがそうさせるのだろう。言うほど頭は、悪くないのだ。

その可憐を持つてしても、聖愛の厳しきは遠慮したい、と思うほどのものらしい。

「ナナさんも居たし、チーム入ってから驚きました！」

キャプテンの凄いことといったら……どしてこの人、ユースにいないんだろうって思いましたもん！」

「女子はまだ、なかなか、スカウト網も追いつかないからね……特に若い世代

「は」

結局その後、美緒も呼ばれた。

「そうですね。あと、エレとか、もう、凄い脚で、びつくりしたし、あ！ 脚といえど流乃ネエ！ あーんな、ねえコーチ、あの人、陸上でも金メダル狙えますよね!!」

「非公式追い風で9秒台持つてる、つていう都市伝説がジョークに聞こえないからなあ」

「あの、スピード乗った時の目眩する速さ……マキ姉もテクニクだったら全然代表級だし、忍様、反応凄いいし、あと、えと、あと」

「はは……とにかく、これなら、つて思ってたよな」

「そうですね！ このチームで全部のボール回して貰えば、いくらでも点が獲れる。いくらでも獲ってみせる！ そう思いました！」

「うん」

気に入った。

当たり前のように、傲慢でもなく言い聞かせるでもなく、ごく自然にそう言い放つ可憐が、とても気に入った。

強力なフィニッシュャーを得る。

それは料理で言えばメインディッシュがバツチリ決まったようなもので、これほど残りの組み立ての楽な話はない。極端に言えば、あとは穴さえ開けなければ、可憐が全部なんとかしてくれるのだ。

「……でも」

「ん？」

「コーチが、一番凄いなと思います」

少し頬を染めながら、可憐はそんなことを言い出す。

「僕が？」

「はい。はつぽの力を見抜いたのとか、エレの育て方とか、クー先輩のコンバートとか、あと……あります」

「ああ……」

「……本人はどう考えてるか、よくわかんないんですけど、もし、もしも、ずっとサッカーやっついていきたい、って思ってるなら、すごく、すごく嬉しいです。あの子とコンビを組めれば、同じチームに居れば、どんな相手にだって負けはしない。」

あの子は……天才です」

「……だね」

「間違いないです。美緒さんも凄い、ナナさんも凄い、清水さんも凄い、国見さんも凄い、葦崎さんも凄い、福岡さんも凄い……でも、同世代で一人、一番スゴイのを挙げろ、っていわれたら、あたし、天王寺あります、って言います。」

コーチは……それを、試合も見ずに直感で見抜きました。

あたし、ありすもですけど、この人すげえ、この人について行こう、そう思いました。あの試合の、最中に」

「……」

いや、わりと練習は真剣に見てその時いろいろ考えたんだが……と真実をバラしたくなつたが、我慢した。

あの試合。大地が、初めてこのチームの——まだ『ミラクルズ』という名では無かつた頃のチームを——率いた試合のことである。

やはり、誉められると、誰しも嬉しい。

誉め言葉にも、貶めの言葉にも、不感症になろうと努力しはじめている大地ではあつたが、こと、自分の指揮する選手からの賞賛は、手放しで嬉しい。

「……可憐も、凄いき。ありすの凄さとはまた別の凄さがある」

「いえ、あたしは……まだまだ、です」

顔を真つ赤にしてうつむく。

この子は、いい子だ。

そう思った。

自信と謙虚が、実にいい具合に同居している。

伸びる。そして、僕が、伸ばす。

そんな気持ちからか、少し、照れそうだけど、思い切って、言った。

「可憐。

一緒に成長しよう。

……ついてきて、くれるかな」

「はい！ もちろん！」

「なにがあっても？」

「ハイッ!!」

まるで新郎新婦誓いの言葉、でも、可憐は余分なことなどこれっぽっちも考え

ず、思い切りうなずいた。大地も、それに応えて、大きく大きくうなずいた。

——軸を得たチーム作りは、本人も選手達も周囲も驚くほど上手いく。嘘ではないかと思うほど強くなり、各々の能力が、個性が伸び、そして……勝った。勝って勝って勝ちまくった。

点も獲りまくった。一試合平均得点7点弱。サッカーの数字ではない。すでにその話は列強に伝わっているらしい。

あの見る者を和ませたほのぼの素人さんチームが、どうやら今年はかなり強くなつて来るらしい、と。

可憐は一年生にも関わらずプロ・リーグ関係者が挨拶に訪れる逸材である。彼女がいるだけで要注意、しかも同じく名の売れた、難波鳴海と長居美緒までいる……無論、本命ではない。だが、穴馬券として購入検討しても誰も笑わない程度には、優勝も狙えた。

上町大地は、まず予選を勝ち抜き、ミラクルズをクイーンズカップに導かねばならない。そして本選では、できるだけ、できれば一番、高い位置に登り詰める。結果は、神のみぞ知る。

だが、それにふさわしい、と誰もが認める最高のチームを作る、それは、「やればできる」ことだと、彼は信じていた。

そしてもう一つ。

彼には誰にも、マネージャーの古都にも、キャプテンの美緒にも、言わない野望があった。

おこがましいことかもしれない。生意気なことかもしれない。

だが、若さのせいにしてでも、追い求めたい。

それは、チームの誰をも、フル代表に呼ばれてもいいような、一流の選手に育て上げること。

美緒、ナナ、流乃、ありす、そして……可憐。

彼女たちを、サポーターに夢と希望を与えるような、そんなサッカー選手に育てたい……

それが、戦いの中で彼が抱くようになった、大きな大きな、しかしそれが故にやりがいのある……のぞみ、である。

彼は、困難と闘い続ける。

『勝ちながら育てる』という、全ての指導者が直面するこの二律背反と、この齢にしてすでに。

しかし、彼は逃げない。絶対に、逃げない。

それが、チームのみならず、彼を知る者、周囲全てが、その背を押しその手を取る、彼の資質だった。いや、そう言うとき大地は反論するかもしれない。

それは、資質ではなく意志です、とでも。

どちらにしろ彼は、おそらくはチームの誰よりも、闘っていた。  
なにせ彼の闘いは、九〇分では終わらない。二十四時間、三百六十五日である。



ドンドンドドンドン……

人出、四桁に迫ろうかという大サポーター団。この日のために下ろしたて、ピ  
ンクの大チームフラッグが宙を舞い、鬨の声が地を揺るがした。学校関係者だけ  
ではない。プロデューズ担当空堀からぼりさとる三十六を中心に、様々な仕掛けを打ちに打ち、

地域に密着した「楽しい」サッカーチームとして成長してきたミラクルズ。地元  
商店街の人々や、近くの小中学校の子供達の顔も見える。その大勢を、サポート  
リーダー千林哲哉せんばやしつやが音頭を取って盛り上げ、実況担当の高安和輝たかやすかずてるがマイクを取つ  
て沸かせた。

皆が心待ちにしたハレの船出の日、もはやお祭り騒ぎである。

いかに庭の柿の実をもぐより簡単な相手でも、このサポーターの手前、恥ずか

しい真似は、できない。

その声援を全身で快く受けながら、試合前最後のミーティング。

先発発表。今回は直前となった。

しかしおおよそ予想はついている。大切な緒戦。いくら相手が弱くてもきつと、いつものアレで、いつものスタメンだ。

「……フォーメーション、ダブルダイヤモンド4―4―2。

GK、守口忍。

ディフェンス右から、西九条明日葉、天満蘭、梅田もも、和泉流乃」

うなずく、拳を握る、拳を叩く、大きく息を吸い込む。各々が胸の決意を、その小さな仕草にのせる。

「中盤底、長居美緒、ゲームキャプテン。

右サイドハーフ難波鳴海、左サイドハーフ平野エレナ、

トツプ下、天王寺ありす」

よし、行くぞ。

そんな空気がその空間に充填しつくしたまきにその瞬間。

「FW、右、森之宮胡桃、

左、堺愛」

「えっ!?!」

予想だにしなかった最後の一言に、場が凍った。

なぜ、可憐ではないのだ。

険しい顔で手元の作戦ボードから瞳を上げて、それをちらりと見た大地。

空気が色が、不穏に変わる。

理解できない。エアポケットのような感情の真空が、そこを支配する。

彼は構わず、続けた。

「緒戦。なによりも大切だ。当たり前だが……

絶対に勝つぞ」

反応は無言。

パニックが収まらない。

それを睥睨して、大地は口元を歪め眉をひそめた。普段の彼には見られないような、厳しく、怖い顔である。

しかし、一番最初に自分を取り戻したのは……やはり、キャプテン美緒。私にもわからない。

が、今は、そんなことを言っている場合ではない。

「……コーチ。すいません。みんな緊張しています。

もう一度、激、お願いします」

その一言に、我に返る。

そうだ。戦いは、今日の前にある。

まずは、これだ。

「ん。

……絶対に、勝つぞ!!」

「「「ハイッ!!」」」

全てを吹き飛ばす全員肚底からの気合いが、その場に叩きつけられた。

ある者は拳を振り、ある者は頬を張り、ある者は早くもその場で脚を回し、それぞれやり方で気持ちを高めた。スタメンも、リザーブも。

……ただ一人を除いて。

その一人は、幽鬼のようにフラフラと小さなベンチに向かい、ゆっくり、倒れるように腰を下ろした。そして、どこも見えない虚ろな目を、虚空に彷徨させた。

古都は、自分の予想の甘さに、ほぞをかんだ。

コーチが何かを企んでいること自体は、今朝会った瞬間から、その見たこともない険しい表情で想像がついた。

しかし、この大切な緒戦でエースの先発落ちとは。

コーチは本気で、可憐に何かをさせようとしている。

それが何かはまだわからないが、少なくとも、コーチの本気度合いは半端なものではない。

可憐の反応も想像できなかった。戦術のテストという理由で外されても騒ぎまくる彼女である。理由もなく落とされて、まさかこんな、地獄に堕ちたような表情で座り込むとは……それほど、シヨックなのだろう。

しかしこんな状態でベンチに座って、果たしてそれが可憐のためになることなのか。疑問は、尽きない。

とにもかくにも、キックオフの笛が鳴る。

長い、長い戦いの、幕開けである。

——開始すぐ、やはり勝負にならない相手であることが誰の目にも明らかとなる。技術、運動能力、戦術……まるで大人と子供である。サポーター達が「可憐はどうしたか」と思う暇すらもない。

3分。

先制点はやはりこの人。

中央でボールを刈ったキャプテン、ままよとばかりにそのままドリブル。一人、二人、三人、最後は軽くフェイントを入れると、キャプテンマークのC Bセンターバックがいとも簡単に騙された。ぶち抜いて、右脚を振り抜く。GK、反応もできない。

ゴール。

記念すべき、予選初ゴール。

そのあまりに簡単なゴールにも、美緒は、集まったサポーターに感謝を捧げ、これからの戦いに想いを馳せるかのように、胸元で両手を組んで目を伏せた。

“女神の祈り”。

大切な時に出る、大切な時にしか出ない、彼女のゴールパフォーマンス。

イレブンも、ベンチも、そして客席も、沸いた。

いつもの感じを、取り戻した。

“行け。吹き飛ばせ”

そんな気持ちだが、一気に爆発する。

ナナが放り込む。胡桃が合わせる。追加点。

流乃が走る。エレが追い抜く。ボールをもらって、マイナスへ。ありすが飛び込む、追加点。

美緒が中央をドリブル。敵をおびき寄せて、ど真ん中スルーパス。ありすに通って、追加点……

着々と入っていく得点、その度に球技場全体が沸きに沸いた。

ベンチも、いつしかいつもの笑顔と大騒ぎを取り戻していた。

本来可憐が居るべき場所で、愛はよく戦った。裏を狙い、守備に走り、左に開いて基点になって、クロスが入ればよく食らいついた。彼女は一度、胡桃と組んで先発したことがある。両方が中央に貼りついて失敗だった。だから今日は大きく動いて、胡桃を助けた。

余裕があるからか、味方もよくそのフォローをした。流乃はいつものクセ球を封じて、丁寧な丁寧なクロスを送った。ナナは少し緩めに、コントロール最重視でDF裏を爆撃した。ポスト胡桃も、じっくりためて、離れた。ありすはいつものように閃きと本能に頼らず、愛をよく見て、パスを出した。

そういう一連の確実なプレーが、レベル差のある相手にはフィットしていた。ゲームのようにポンプンと、得点が入った。

愛も悪いFWではない。いやむしろ、高度なチームメイトに引つ張り上げられて、知らぬ間に高校女子であれば、どこへ出しても恥ずかしくない一流選手に育っていた。

冗談のような容姿の美しさに騙されてはいけない。フィジカルの強さならチームでも上位に位置する。白い細腕がベンチプレスで巨大なバーベルを持ち上げる凶など、加工画像かと我が目を疑う。

売り物は「なぜかそこにいる」嗅覚と、顔に似合わぬ強引さ。

とにかく無理矢理にでも前を向いて、撃てる時にはすぐさまシュートを撃つ。シンプルだが、だからこそMFやコンビを組むもう一人のFWには、使われやすいFWでもある。

くさびのボールを最前列で受けた。ありすがその横を駆け抜ける。送れば、ありすなら確実に1点だ。しかし、愛にはそこでその選択肢は無い。

くるり、と振り向きざま、思い切り右脚を振り抜く。

ズバンッ！

鮮烈な一撃が、ゴールネットを揺らした。

腰までの長い髪が、ふわり、と美しく舞った。

映画のようなそのワンシーンに、サポーター大興奮。

鳴り物と絶叫が、地響きを上げる。

「プリンセス絶好調ーッ！ たまんネーッ！

アタシ、アップしてくるッ!!」

同じ前目の愛の活躍を見て、早くもマキ、我慢できずに立ち上がる。

「つき合う」

由美子も立った。トレードマーク、オレンジのガードグラスを掛けてマキに続く。

「……ま、どうやっても負けそうにないし。動いてくるわ。」

こつとん、あとよろしく」

はなこがメモ・ボードの上に眼鏡を置いた。細いヘアバンドを後ろに結ぶ。

「あ、はい！ おまかせ！」

「じゃ、あたしも!!」

千里も立った。ただ一瞬、躊躇する。友の姿が目に入った。試合開始から微動だにしない、どこを見てるかもわからない、親友の姿が。

掛ける言葉が見つからなかった。ベンチはいつもだけど、こいつをアップに誘った経験なんて、一度もない。

「千里」

振り返ると、厳しい目つきの美原先輩が、*「行こう」*と親指を振った。

後ろ髪引かれながらも、千里は目をつぶって、それに従う。

言葉が無いなら、掛けるべきじゃないのかもしれない。

美原先輩はいつもこういう時、うるさ型の役を買って出てくれる。

その小さな背に小さく感謝しながら、後ろに続いた。

一人、残された古都。どんより曇った、どころか嵐雷鳴吹き荒れる可憐と、今日は著しく怖い顔のコーチの間で、まるで荒波に遊ばれる小舟。

「ふええええええええん……」

と、コーチがちらり、とこちらを振り返って、口を開いた。助かった。

「古都」

「はい！」

いつもみたいに優しく「こつとん」とは呼びかけてくれなかった。硬い声抑えた調子で、ちぎり捨てるように、言う。

「ありすに代えてマキ、後半頭から。明日葉に代えてはなこ、後半頭から。ユミ姉はラスト5分、エレーナ。もしくは怪我人」

「は、はい！ 伝えます!!」

「……」

ん、と無言のままうなずいて、また戦況に目を戻した。

それ以降、試合終了まで、コーチは一言も口を開いてくれなかった。

ss

「おつかれさま〜 おつかれさま〜！ おつかれさま！ ……」

試合終了。

古都はタオルとドリンクを忙しく配りながら、いつもと違う雰囲気気づいていた。

機嫌が悪い。いや、そうじゃない。なんだろう、この感じ……

後半からの三人を除いた面々が、一様に硬い顔をしていた。いくらレベル差があるとは言え、22対0の容赦無い爆勝である。船出の祝砲としては、派手でい

いではないか。

疑問は遠慮無く、ぶつけてみることにした。ならば、ぶつけやすいこの人である。

「あく、ナナさん、どしたんですか？ ずいぶんつまんなさそうな顔してます  
う」

「ん？ ああ……」

圧勝にもかかわらず、自身3得点5アシストの大活躍であるにも関わらず、ナナは小首すら傾げていた。

「相手が弱すぎて、不完全燃焼ですかあ？」

「ん？ ん、まあ、そんな感じなんかな」

ナナは、自分に言い聞かせるようにそう呟く。めんどくさそうに、美緒に振つた。

「でや、キャプテン」

「あんまり弱い相手に無茶苦茶勝ちすぎると、フォーム崩すのが怖いね」

「それもあんな。サッカーは、5―0とかで勝った後ポロツと負けることがよくあるからな。気合い抜けんよう、気いつけなあかん」

「勝つて兜の緒を締めよ、だね……」

ナナ。円陣、組もうか！」

「お。せやな！ そうしよそうしよ！

おーい、みんな集まってー!!

集まってー！ー！」

そんな会話を聞いてか聞かずか、なんだなんだと皆が集まる。

「円陣？ いいね、気合い入れ直しだね！」

「ハイヨー！ コレ好きー！ー！」

ぞろぞろと集まる面子に、もしや、いやおそらく、と古都は慌てて確認した。

……やっぱり。

石像のように固まっていた可憐は、試合が終わっても、同じ姿だった。すつ飛んでいく。せつかくキャプテンやナナさんが盛り上げようとしてくれているのに、こんなところを見つかったら台無しだ。腕を取った。

「……可憐ちゃん!!」

「あ……こつとん、なに?」

「『なに?』じゃないよお。円陣組むから、みんなで。ほら、あっち」

「円陣つて……試合、後半?」

「もお……」

「いいから早く!!」

まさかそこまで心ここにあらずだとは思わなかった。腕をひつつかんで、引つ張っていく。案の定、一番遅くなつて、一番目立つ。

でも……キャプテンやナナさんは、不思議に優しい顔をしていた。

輪の中に、可憐と自分の、首と肩を突っ込んだ。

……と、何かが足りない。

顔を上げようとする前に、主将が気づいていた。声を飛ばす。

「コーチ！ コーチもお願いします！」

「え？」

……あ、円陣かい。うん！」

慌ててコーチが、輪の中に入った。主将と副将の間、私達の正面。

その瞬間、一つ、理解した。

“……あれは、怒ってたんじゃない。

苦しんでたんだ。コーチも。

可憐ちゃんと、一緒に”

途端、なんだか随分、ホツとした。

きつと……大丈夫。

きつと全てが、上手く行く。

何の根拠もないけれど、古都はそう感じた。

キャプテンが、始める。

「今日はみんなで勝ちました!! 大きく勝ちました!!

でも、これは最初の一步です!!

明日からまた、いえ、今この時からまた、次の戦いに備えよう!!

奢らず、油断せず、自信を持って、なにより楽しく、

サッカーを、しよう!!」

「ハイッ!!」

「此花選手、音頭!!」

「っ……」

「……」

ここでこの指名、これこそ我らが主将である。

全員が、此花選手を見つめた。

可憐はその視線から逃れるように地面を向いて、けれどもしつかりと、誓いの言葉を唱え始めた。

「……ハイッ！」

……Never Giveup, Go Ahead,」

“げっしてあきらめるな。まえへすすめ”

一文字ずつ、噛みしめるように。

「and DO…」

“ぞして……”

一呼吸。

全員が、いろんなもやもやを吹き飛ばす、力一杯の声を上げる。

「MIRACLES!!」

「奇跡を起こせ」

勝利の余韻を楽しむサポーターから、暖かな拍手が起きた。

どの顔にも、晴れやかな笑顔が戻った。

我に返った可憐は、古都の片づけを手伝った。普段その役目の千里、今日は楽をすることにした。

荷物を担いで帰る道。

カケラも疲れていない足が、むしろ思うように前に進まなかった。

勝つても、負けても、疲れてもいない。

それがどんなにつまらないことか。

それを発見しただけでも、今日は収穫があった。

身体中に、使わなかったエネルギーが渦巻いてる。

気持ち悪くなりそうだった。

リザーブのみんなは、こんなにも辛い思いをしているなんて。

こんなことなら、九〇分足が攣るまで走っていた方が、ずっと楽だ。

もう嫌だ。

もうたくさんだ。

こんな経験は、一度でいい。

ふと、つまらないことに気づく。

サッカーを始めてから、初めて。

生まれて初めて、ベンチで過ごした。

“……なんとかしなきゃ……”

みんなの後ろを、みんなの背中を見つめながら、ゆつくり歩いた。いつも先頭、いつでも先頭、そんな経験も、初めてだった。

“あたし、やつぱバカだ。なんにも知らない”

もちろんその後ろをコーチが、その背を見つめながら歩いていることも、知らない。

偶然、いや必然。彼も彼女も、同じことを考えていた。

“なんとか、しなきゃな……”

とにもかくにも、試合が一つ、終わった。

予選を一つ、勝ち抜いた。

今は、休息の一時である。

「……おかえり、可憐、ご飯はー？」

「……みんなと食べてきた」

「そ。冷蔵庫に片づけておくからお腹減ったら食べなさいね」

「ん」

とんとんとんとん……

「……試合はー？ どうだったのー？」

「勝った」

母の声から逃げるように、階段を上がる。試合の後は足が辛くて登るのも億劫で、一番下の段で座り込むこともあるのに、今日は跳ねるように足が動いた。それがまた、切なかった。

部屋に入ると、明かりもつけずに、ベッドに倒れた。

いつものように、心地よい疲労ではなく、ただ、気怠いだけの疲労が、全身を

蝕んでいた。横になつた瞬間睡魔の虜になるようなことも、ない。

蒼い闇の中、頭の中には、試合中から続く同じ疑問が、ループしていた。

“なぜ”

見つからなかった。

調子は良かった。絶好調と言つて良かった。

怪我もなければ、戦術のテストでもなければ、スケジュール対策の温存でもない。  
い。

いや。それよりも。

理由がわからないことより、理由を覚えてくれないことが、辛かった。

そして相変わらず胃のあたりを襲う、未消化のエネルギー。嘔吐感さえ伴う。

つらい。つらい。つらい。

「ちー、いつもこんな目にあってるんだ……」

偉いな、アイツ」

友の姿を思い出す。2nd GK、事故でも起きない限り、出番はない。それなのに千里は、いつもいつも笑って試合に臨んで、笑って後かたづけをして、笑って帰り道で、誰よりも騒いだ。

「見たことないものを、見せるためかな」

それならば、もつと早く。

「飢えさせる、ためかな」

そんなことをしてもらわなくても、あたしは、いつも、飢えてる。

試合に、サッカーに、ボールに、そして、ゴールに。

ゴールに。

がば、と跳ね起きると、床のボールに足を伸ばした。

足裏でこすつて甲に乗せて、ふわり、浮かせると、額の真ん中で、ぽん、受けた。それをぽんつ、と一つ大きく浮かせて、

天井に触れるか触れないか。

その最高点を見つめると、不意に、身体の奥を衝動が突き上げる。右脚跳ね上げてオーヴァー・ヘッドを叩き込む、そのイメージが。すんで、こらえた。

こらえたから、何も出来なかった。

……ぼとん。

ふとももの間に、ボールの感触。

可憐はまだ、天井を見ていた。

ボールを見た瞬間、追い出された全て。真っ白になった頭。

そこに戻ってきたのは、「なぜ」なんてものではなくて、

涙。

さびしくて、つらくて、せつなくて、どうしようもなくて、  
なみだ。

ボールを両手でかき抱いた。

磨く時以外、なるべく手で触らないように自分に銘じているボールを、両腕で抱きしめて、額を押しつけて、目を押しつけて、

泣いた。

「使ってください、がんばりますから。」

使ってください、がんばりますから。」

コーチ……神様……

……コーチ……」

祈りが、いつしか眠りへと変わっていた。  
身体よりも、こころが、疲れ果てていた。

可憐は眠った。

キツネのように、丸くなって眠った。

誰よりも古くからの、友を抱いて。

§

翌日は完全休養日、翌々日は身体を動かす調整。

周囲は、ほっと一息をついた。

可憐は、ちゃんと定刻に出てきて、ちゃんと練習をした。声も出した。

ただやはり……先頭は走らなかつた。どんな練習でも誰よりも早く、「一番」

目指してはしゃいで取り組むはずの可憐が、集団に埋没していた。

気遣いたいところだが、一人一人の修正点と、それに基づく細かなメニューが組まれていて、それをこなすのに手一杯、とてもそんな余裕はない。

それでも練習の終わり、仕上げのシュート練習から引き上げる可憐に、ナナが叫んだ。

「かれーーーん!!」

いつものアレ。

ナナのチャンスボールに、可憐が曲芸技で合わせる。それを千里が受けたたりボケたりして笑いが起きる……練習の、締め。

振り返る9番めがけて、ナナが、いつもよりずっと優しい、山なりのボールを放り込んだ。

ふわっ……

……くっ。

可憐はそれを胸でトラップして、  
ぼとり。

と足元に落とした。顔は、呆然。

……呆然としたいのは、こちらである。

“あちやゝゝゝ……やつぱめちやめちや重症やゝゝゝ……”

それを見ていたみんなが、心の中で額を押さえた。

動いているからと安心したのが甘かった。

ナナは怒りというか呆れというか、とにかくそういうもの一切合切を押し殺して、ひきつるような笑顔を作った。

「なにやってんねーん、シュートシュートー！」

いつものーん!!」

「……あ、はい！」

フンッ！

静止状態から半身を捻る。右脚が光るような美しい弧を描いて、地のボールまん真ん中を鬼叩く。無回転、まるで長槍のようなそのシュートが、なんの遠慮も会釈もなく、ゴール左サイドネットへ突き刺さった。

千里には、ボケる間も飛ぶ間も捕る間も無い。

もちろん、笑いも拍手も歓声も、起こらない。

「……ナイツシューーーーーーッ!!」

ヤケクソ気味、というよりはヤケクソそのもののナナの大声が、場を救った。

そしてそれも、事実だった。案外、みんな呆然とシュートそのものを見つめていたのかもしれない。

ぺこ。

軽く頭を一つ下げ、当たり前のように引き上げる可憐。

その横顔を見つめながら、ナナはため息をついた。

……あんだだけボーッととしてあのトラップあのシュートかいな……

アイツ、やっぱりバケモンやな」

「……凄いね」

「なんやあの胸、なんか秘密装置でもついてんか」

寄る流乃に、答えた。

「ウチのLカップと交換して欲しいわ」

「サバ読み過ぎ。」

あたしの言ったのはシュート」

「あんたかて負けてへんやん。力の入れようやったら」

「二〇〇%じゃないのに、だよ？ それも無助走無反動。レベルが違うよ」

「ウチかてどんなブロークン・ハーでもラーメン喰えんで」

「そーゆーたとえ、可憐が可哀想」

「……かわいいそう、か。それをゆーて欲しいんはこっちやで」

「MFばっか苦勞してると思わないでよ。あたしだってバカみたいに辛かったん

だから」

「なにもあんたが辛らないなんてゆーてへんやろ！」

顔を見合わせて、唇を歪めた。

二人とも、考えてることは同じだった。

「……一番の被害者はあーかな。見てみ、今日まだへロンへロンやったで」

「くーも。今日、目が三角。あとエレ。あの子素直だから、不安あるとすぐ顔に出る」

「不感症はタヌキだけか」

「わかんないより。タヌキだからね」

「ぼんぼこぼーん」

「わー」

「これっぼっちも驚いてないクセに……」

「キャプテン、あんたからなんとか言うてーや。嫁の言うことやったら聞くやろ、

旦那

「……逆に言うと」

キャプテンは声を沈めた。真面目だった。

「今しかないよ。こんなことできるの」

「せやけど」「だけど」

「甘えない。例えば、ケガ」

「「うーん……」」

怪我は、ある日突然襲ってくる。もしそうなったらどうするのだ。そこで諦めるのか。万が一可憐を欠いても、私達は、前に進まなければならぬ。

点を、取らねばならぬ。

「鍛えられてるのは可憐ちゃんだけじゃないよ。」

私達も。

「……がんばろ」

ぽん、ぽん。

美緒の両手が、流乃とナナのお尻を、軽く叩いた。

「へえへえ、とりあえずそうしまつき」

「しよがないね。つきあおうか。コーチの道楽に」

「ふふっ」

肩を落とすナナ、両手を上げて伸びをする流乃。

なんのかんのかの言いもつて、頼りになるこの二人。

「よっしゃ！ ほなラーメン喰いにこ！」

「なにが『ほな』なのか意味わかんない」

「だめだめ、あの新開発ラーメンは試合前日だけだよ」

「えくく、えくく、ちよつとぐらいくく」

「だめだめだめだめ」

「……太るよ？」

「みー、それ、なんの脅しにもなっていない。もう太ってるから」

「なんやてー!? 知らんなー!? この『ちよつとぽつちやりバディ』に男はみんなメロメロやねんで〜」

「メロメロなのは若干一名じゃないの?」

「ううーん、アイツにはウチも夕張ぐらいメロンメロン〜」

「いつも思うんだけど、あんたほんと幸せだねえ……」

「ふふふふ……」

そろそろ空が、オレンジに変わっていく。

ss

練習のあと、千里が言いだし、一年は揃って、またいつものドーナツ屋さん  
に居た。でもやつぱり、会話は少ない。

そんな雰囲気になんか耐えかねたのか、千里がズバリ、事の核心に踏み込んだ。

「あー……あの、可憐さ、あの……」

ほら、出れないのはさ、理由、さ」

「……」

「出れない」。その言葉に可憐は瞳をゆつくりと千里に向けた。真剣なそのまなざしに、ちよつとバカっぽい自分の考えに少しだけ躊躇したが、しかし、言ってみなければわかるまい。

「あの……」

ひ、必殺技なんじゃないかな、って」

「「ひつ、必殺技……!?」」

「……」

素っ頓狂な声を上げる周り。当の可憐は眉間に皺を寄せた。

確かに、確かにミラクルズでは各選手の「これは！」という技を、盛り上げる

ためにこう呼んでいる。例えば胡桃なら、背面で飛び、ひねりの力を加えてボールを叩きつける高々度へディングを『ライジングドラゴン』と名付け……

「きつ、きつとコーチのことだから、その完成を待ってんだよ」

「……」

しかしいくらなんでも、「必殺技を完成させるために」選手を千尋の谷に突き落とす、なんてことがこの現代社会で許されるのだろうか。

三十年前のスポ根マンガでもあるまいし。

じゃ具体的にはどうすればよいのだ。

「……火を噴くシュートとか？」

「そりゃスゲエ！ それだよ可憐！」

「無理」

それは可憐が正しい。

「ぶつ、分身シュート！」

「もつと無理」

「大回転シュートはどうデスカ」

「それはあんたの技じゃん」

エレの必殺技は、ボール前で身体と脚を縦に一回転させる、いかにも元ファイギユアスケーターならではの『フェアリーリ्यूジョン』。

「いえ、ですから、四回転ぐらい」

「……」

「ほら、ハンマー投げも四回回ります」

「いや……ハンマーと一緒にされても……」

しかし、一回転でもシュートモーションに時間を掛けられるMFのミドル用の技だ。ましてクルクル回っているのは、その隙にボールを奪われる。戦隊物特撮番組ではないのだ。必殺技モーションを敵が待っていてくれる保証は、どこにもない。とかなんとか考える前に、それは見るからにアホである。

「ま、まあカレだからさ、そういう軽いひねりの入ったヤツじゃなくてさ。

センターサークルから直接ゴールに叩つこむとか、そういう直線的なヤツがいーんじやないかな」

「そうだね!!」

「デスね!!」

いや、そんな簡単に同意されても。

そんなもんポンポン撃てるようなら、今頃レアル・マドリッドで戦っている。

「そうだ！ 可憐ちゃんには、アレがあるじゃない！」

勢いづく古都が、一つ、思い出す。

「あつ！ そうデスね！」

「おー、忘れてたぜ、アレがあつた！

『ファイナルドライブ』!!」

「あれは……」

……未完成だし」

そこで素直に「偶然だから」と言えなかったのは、見栄、というよりもFWの意地だった。

——ある試合、右MFナナから、彼女必殺のドライブクロス『シューティンループス』が上がった。ターゲットは胡桃の頭だが、彼女はDFにひっつかかっている。

“追いつけるか”

考える前に走るのが可憐である。間一髪、ダイレクトで間に合った。縦にベラボウなトップスピンのかかるそのボールを、トウで合わせる。ギリギリ、擦り上げる形になった。

すると。

まず見たこともない厳しく小さな弧を描き、GK遙か手前の地面に突き刺さる。

そこから面白い。二重にトップスピンを掛けられたボールは、その回転力を地を這う推進力にして、真つ直ぐGKの股間をぶち抜いた。

ヴォレー対応、対空迎撃姿勢のGKには、指一本動かさなかつた。

まるで生き物のようなその動きに、見た者全員が絶句した後、褒めちぎつた。凄いい技だと。

しかし、要は単なる偶然である。

その後何度もクロスを放り込んでもらつて試してみたが、再現できない。

合わせただけでは、浮き上がる。強く蹴ると、ただのヴォレーになる。いや、普通にヴォレーで合わせた方が、技術のある可憐にとつては「確率の高い」シュートだ。

そもそもドライブを掛けること自体、非常に高度な技術が必要で、いつでもどこでも自在に繰り出せるというものではない。しかもこの技の場合、一つ前にドライブが掛かつてる必要がある。つまり誰か、具体的にはナナの助けが必要であ

り、それも困難に拍車を掛けていた。

が、印象はあまりにも強烈だった。そして、可憐にしか撃てないであろうことも、確かだった。しかし……同じシユートを自在に撃てるようになるのかどうか、可憐にはまるで自信がない。

「でも、あのシユートを撃てる可能性があるのは、可憐ちゃんだけだから！ どんどん撃つていいと思うよ！」

「はは……いつも撃てるわけじゃないシユートには、頼れないよ」

「うーん……そうかなー……」

小首を傾げるありすに苦笑する。

存在自体がバクチのファンタジスタは、決めるべき時に決めねばならぬストライカーと、似ているようでまるで逆だ。

「あ、そうか、だからコーチはあーをFWに育てようとは思わないのか」

と、可憐は一つ賢くなった。あの抜群のスピード、加速、ドリブル、突破力、なによりイマジネーション、得点能力天下一品の天王寺ありすを、大地は緊急時を除いて、決して最前線には置こうとはしない。理由は、これだろう。

しかし。

もしあたしと2トップなら……

妄想する。

胡桃とのコンビと同じぐらいには、やってのけれそうな気がした。いや、ひよつとするとともに点を取れるかもしれない。

守備力のほとんどないありすを2トップ下に置く今のフォーメーション・ダブルダイヤモンドは、実質3トップと言ってもよく、いくらなんでも攻めに重点を置きすぎる。本当はありすと2トップを組んで、その下には守備もでき走力もスタミナもある、MF型のシャドウストライカーを置いた方が良くはないか。足りない高さはそこで補えばいい。

ナナさんか。ダメだ、攻撃力は文句なしだが、高さが無いし、守備が嫌いだし、トップ下に置くことであるクロスを失えば、チームとしての得点力が下がる。

キャプテンか。最高だろう。しかし、ではボランチはどうする？ 大地コーチはボランチ、センターMFをどこよりも重視する。だからこそ、10番、チーム最高の選手をそこに置いているのだ。

〃……キャプテンが、あと一人いれば〃

「じゃ、じゃあ新・必殺技しかないだろ!？」

また始まった。

無茶な妄想は千里の大声に遮られた。つい、チームのことになると、文字通り夢中になる。

「はは……そんなの簡単に言ったって、パツとできるもんじゃないって」

「やってみなきゃわかんないだろ!？」

カレ、あんたいつからそんな弱気になったんだよ！」

「んなこと言つたつて……」

「沖繩の海ですー!!」

きた……

明日葉はいつも、イキナリである。

「なつ、なにが沖繩の海なの、はっばちゃん」

「沖繩の海で特訓ですー！ 足腰を！ 砂浜をこう、タイヤを一杯つけて走りまわるんですー！ するとたぶん、沈む夕陽に向かってシュートを撃つと、海がバリバリと割れてむこーうの島まで道ができて、海底のナマコが乾いて……困りますね」

「……」

「えと、乾いたナマコは拾いましょう！」

中華料理に入つてると美味しいですよね！

私、大好きですー」

「……」

「あつ、もちろん、フカヒレと、干しアワビも一緒ですよ？

貝柱にエビに、海の乾いたものを全部拾って、中華パーティーですー！

中華パーティー・イン・沖繩！

青い海・白い雲・茶色い中華スープ！

凄く素敵な予感がしますー！」

「ブツ」

「あははははははははははははははは……」

千里が我慢しきれず吹いた。それを合図に、みんなでお腹を押しえて笑う。

「……ダメですかー？」

「ぶはははは、いや、だめ、ダメじゃないけどさ、あはは、は、はっば、可憐の

特訓はどこへ行つたんだよ」

「あ、あれ？ えーと」

「あと、鉄ゲタとスプリングのギプスも必要だね！」

「そおでした！ 鉄ゲタですとも！ どどんと10キロずつ！ それにそれに、ギプス、ギプスも大切ですよー！ こつちと、こつちと、こう、クロスに！」

「あたし死んじやうよー！」

「「あははははははははは……」」

「だ、だめだよこつとん、明日葉ちゃんどんどんノってくるからー」

「ふふふふふ……デスけど、海を割るようなシュートって凄いでスね。可憐さんならきつと撃てマス」

「はは、やや、だけど」

胸のつつかえが流れるような笑いに身を任せながら、なんとか遮る。いつものな  
ら、一番最初にノってバカ騒ぎするけど、自分のことだけに……

「……シュートは入りやいーんだから、無理に力入れる必要ないよ。」

ゴールにパスする感じ、つてよく言うじゃん？」

「嘘つけー!!」

「わ」

ヘッドロックをかまして、ぽかぽかと可憐を殴る千里。

「ああ、ダメ、ダメだよちーちゃん、それ以上頭を……」

「いや、コイツは多少頭を……」

「どーしてそこで止めるんだよおお！」

「あはは、冗談冗談。」

あんたほんとにそんな細かいこと考えてんの？

おもつきり撃ってるだけだろ？」

「んなことないよ！ ちゃんといろいろ考えてるつてば！」

「ほー、今日の夕食の献立とか？」

「ちがーうつてばーっ！」

「でも、さすが可憐ちゃんだね！」

私、そんな余裕無いよ、いつも！」

「あ、わたしもデス」

「あたしもかなあ……」

おや、と思いつつ、補足する。

「んーと、余裕、っていうんじゃなくて、なんてんだろ、こう、

イメージ、っていうの？」

あのへんに、こう、ゴールする、とか、ない？」

ふるふるふる。

ありますが髪を揺らした。

可憐は、そのことに驚いた。ありすは、あれだけ得点を決めていて、そういうイメージを持たないという。

「……じゃあ……あたしだけなのかな、そーゆーの」

「へえ、さすがだねえ、落ち着きが違うねえ、本職は」

「や、じゃなくて」

違う。

落ち着き、というのとも違う。

あたしだって、DFに囲まれて大慌てでシュートすることだって多い。でも、そんな時でも。

「……こう、糸引くみたいに、そうだ、光に吸い込まれるように！」

「なんだかテツガクテキなことを言い出したぞ、バカレンともあろうものが」

「……あ……」

別にバカにされたからではないが、可憐は言葉に詰まった。

どうも、会話が通じていない。

“あつ”

古都が気づいた。

口には出さない。絶対に出すなと、コーチに言われた。

——ある日だった。練習を見つめながらいつものようにサッカー雑談になった。FWに必要なものはなにか。決定力、1ON1、ドリブル、シュートの速さ、狩人の落ち着き、肉食獣の瞬発力……高さ、ポスト、守備までいろいろ語って、語りすぎた自分に疲れたように、コーチは小さなため息をついた。

「……結局。単なるFWはいいんだ。どんなタイプでも、適性を見て、伸ばせば作れる。ただ……」

『ストライカー』は、そう簡単には手に入らない」

「ストライカー……点を獲る人、ですか」

「そう」

「それには、何が必要なんですか？」

大地は目線を逸らして、少し間を置いて、漏らした。

「……これは誰にも、言っちゃダメだよ。誰にも」

それだけ信じて貰っているという証拠、古都は内容よりも、それが嬉しくて、覚えていた。

「ストライカーは天性だ。それはもう、どうしようもない」

無粋承知、好奇心が勝つ。古都は日頃の気配りを捨て、訊いた。

「ウチでは、誰にありますか」

コーチはチラリ、と一瞬だけ目を切ったが、その真剣な眼差しに、答えを用意してくれた。冷たい、だが、それ故に間違いなく、真実。

「二人」

ならば、可憐である。

“……可憐ちゃんにはなにか、他の人とは違う感覚があるんだ”

「……ま、いつか。」

「ゴールすれば、いーんだからね」  
難しく考えることを止めた可憐に代わって、古都が思いを巡らせた。

見えないものが見えている。

だから、他人には奇跡としか思えないシュートを、当たり前のように撃てる。  
奇跡としか思えないゴールが、当たり前のように決まる。

それが、チームを、どれほど鼓舞するか。

天が味方しているのだ。勝利の女神が微笑んでいるのだ。

どうやって負けられよう。

可憐のシュート、そこにある力、その源泉を垣間見た気がした。

そしてコーチは、おそらく、これを可憐に求めている。

むしろ、これだけを。

「……でも」

いつの間にか沖縄中華パーティから戻っていた明日葉が、口を挟んだ。珍しく、真顔である。

「やっぱり、可憐さんのゴールが、一番です。」

一番盛り上がるのは、可憐さんのゴールです」

いつも右サイドバック最後方から祝いに駆けつける彼女の言葉には、説得力があつた。

「えへへ、そ、そっかな」

「ゴールパフォーマンスも効いてると思うぜ。」

王様べしばりのジャンプガッツ。

ああいう『あたし一番』みたいな似合うの、アンタだけだし」

「ま、ね」

と同時に、黒人ばりのバネを持たねばできもしない。

「うん、すつごくカッコイイよね。」

私も、いつかああいうのやろうって思うんだけど、恥ずかしくて……」

「あーダメダメダメダメ、あーはいつものがいの！」

あれ、サポーターには大ウケなんだからさ！」

「そうかな」

「そうだよ、あたしもあーみたいに可愛く……」

「ムリ」

「あによー!! あたしだってこう、両手胸の前で合わせてー、小首かしげてー、ほっぺピンクにしてー、ぺこっ! って可愛くお辞儀するの!」

これをありすがやると、サポーターが、いや観客がスタジアムが、ゴールそのものよりも、沸く。悶絶してその場で倒れる若い男性も、多い。

「あゝムリムリムリムリムリムリ。」

つーかアレ似合うのはあーだけ。

エレでもキツイし、ナナさんやると笑いのネタだしね」

「一人忘れてるよ」

「ん？ 誰、こつとん？ あんた？」

「キャプテン」

「あー……あー……あー……」

「三回言った。ね？」

「やりうるねえ……なんたつて夕……千両役者だからねえ」

「『夕』つて言った。動物の名前を言おうとした」

「なに、奢って欲しい？」

「私はどうでしょうー？」

「あ……んー……貴様はイケそうな気もするが……別のを考えなさい」

「えー、えー、えー、そんなー、うーん、うーん、うーん」

「よしよし、自分で何とかする、大切なこったね」

「そつかなー、あたし、似合わないかなー、そつかなー、今度やってみよ」

「ダメだつっの。」

……つーかサポーターはあんたのジャンプガッツ見たくて来てんだからさ、それを見せてやんなよ」

つまりは、ゴールを、見せてやんなよ。

「そうだね。実は可憐ちゃんのアレって、よく見てるようで、あんまり見れないもんね」

「そうデスね。可憐さんは、負けてる時は、ゴールを決めてもまずパフォーマンスしマセンね」

「同点弾でもダメだからね。勝ち越し以降」

「それもPKじゃダメだし」

ミラクルズのPKキッカーは、ビハインドや同点、あるいは緊迫した戦況、つまり重圧のかかる場合美緒。リードがあり、流れが押せ押せでかつ、本人かFWではない者が取ったPKに限って、可憐にもそれが許されている。逆に言うと、二人しか居ないPKキッカーの片翼を任されても、いる。

——余談だが、この確実だがいささか決め打ちに過ぎるやり方は、あらゆる事態に備えていたはずの大地にとつて蟻の一穴となつた。ためにミラクルズは窮地に立たされる。が、それは後の話。

「……みんなよく見てるねー」

少し、照れくさかつた。

「うん。いつもボール抱えて走ってるよね。負けてる時は。」

あれも、カッコだけじゃなくつて、気持ちが伝わるから、いいと思うよ」

「そそ。あれつてさ、普通さ、なんつーか」

『気合い入れるためにわざわざやってる』

つて感じになるんだけどさ、でも可憐だと、本気で時間を惜しむ気持ちになるよね」

「ま、まあ、ああいう時は、ほんとに急いであるから……

だからまー、身体が勝手に、ね。

調子に乗っていると勝ってる時にもやつちやつたりして、ナナさんに『走るな』つてこつそり叱られるんだけど。へへ」

「そういえばナナさんのそういうシーンはあまり見ないね」

「あ、あれはあたしに譲ってくれてるんだと思う。」

あの人はその辺、ものすごつく気を遣う人だから」

「へえ」

「ナナさんは凄いよー。負けてる時でも、ゴール決めたら踊ったりするじゃん。

あれ、たぶん全部計算だよ。ほら、士気を……えーと士気を……」

「鼓舞？」

「そうそれ。コブしてるんだと思う。」

あ、そうだ、だからあだし、ジャンプガッツにしようと思っただ。負けてても、ガンと一発気合いぶちかませるように。

ほらあれなら、一瞬で済むからね」

「ほ〜……」

「へえ〜……」

「ふ〜ん……可憐さ」

「ん？」

すぐ目の前に、千里が顔を寄せていた。

「な、なによ」

「意外といろいろ考えてんじゃん」

「意外と、つてあによー。あたしだってサッカーのことはいろいろ考えてるの！」

……サッカーのこといろいろ考えてるから、普段バカなんじゃん  
自分で言つてて、ちよつと哀しい。

「なるほどー!!」

こつとん、これは否定して。

「あ！ だから勉強のできるこつとんはサッカーができないのかー！」

「ナルホドー!!」

エレも。お願いだから否定して。

「あ、でもありすさんはお勉強もできるしサッカーも上手デスよ」

「あ、あーはサッカーの時は何も考えてなさそうだからね」

「うん、そう言われれば、あんまり何も考えてないよ」

「なるほどー!!」

あんたらな。

……ほん。

千里が、肩に肘を載せた。男の子みたいなその仕草、そのまま腕でうりうりと頬を叩かれる。

「ま、どつちにしろ、これから先、絶対出番あんだから、ちゃんと準備はしとくんだぜ。一年のベンチはあたし一人でじゅーぶんだ」

「正直」

ことり、とティーカップをソーサーに置いて、指先を二本だけ組む。

ありすは、時に、怖い。

それは彼女をよく知る皆が、等しく持つ印象である。

血液型を信じれば、典型的なA B型天才肌だった。

羽毛のような優しさと、鋼のような冷厳さが、同居する。

しかしこの二面性、欠点とも言い難い。これがあるからこそ、ここ一番で誰よりも頼りになる。単なる砂糖菓子娘ではない。

それに、事実以外のことは、言わない。

「愛さんでは、持たないよ。

もちろん胡桃さんだけでも。

あなたが、必要です」

大きな目、深い瞳が可憐の眼を射た。

もちろん、負けている可憐ではない。

「………つたりまえじゃん」

血が沸いた。

当たり前だ。

この天才のパスを、他の誰が受けるというのだ。

あたしだ。

あたしでなければ、こいつのパスをゴールにできない。

「行こう」

トレーを手に、立ち上がる。

おしゃべりは、もう終わり。

みな黙って、それに従った。どの顔も、引き締まっていた。

つまらないことを考える暇など、私達にはない。

そんな暇があるのなら……ボールを、蹴ろう。

全ての話は、それからだ。

——外へ出る。

秋風が、心地よかった。

なかなか出てこない明日葉を、千里が引きずり出しに行つた。案の定、「カッ  
コイイ決めポーズ」を考えるのに夢中になつていたらしい。今も目の前で、大騒  
ぎしている。

右手人差し指突き上げて、左手を張り出した腰に、そして両脚を大きく開いて

……

「ふいーヴぁー！」

「今の若者はそれじゃファイバーできないツスねえ……」

「そもそも『ファイバー』ってすごく久しぶりに聞いた単語だよ」

「でも、悪くないと思ひマス」

「ギャグ系だからねえ。はっぱはもうちょい可愛い方がいいーんじゃないの？」

「うーん、うーん、うーん……」

頬を緩めながら後ろから聞いてみると、す、と古都が横に來た。

「……よかった」

「ん？ なにが？」

「元氣そう」

「あは……もう大丈夫。ゴメン」

真横にいた彼女には、地獄を彷徨うような暗い顔を見せたのだろう。反省する。みんな必死で戦ってる時に、自分のことだけ考えていた。理由はどうあれ、それは、やつちやいけない。

「……私も、力になりたかったけど、今回ばかりはコーチ、何も教えてくれないの。憶測でものは言えないし。だから」

「いいよ、こつとん。ありがと。」

あたし、自分でなんとかするよ。

さんきゅ

「可憐ちゃん……」

眩しいぐらいその目は輝いていた。

そしてみんなの馬鹿話を見て、微笑む。

マネージャーとしては力不足に切齒扼腕、けど、彼女はきつと……大丈夫。

「じゃこれですー!!」

『このボールが目に入らぬかー』」

「入らない入らない。人の話を聞け。可愛い方がいいつつつたろ」

「そもそもそれ、主役の人のセリフじゃないよ」

「ではでは、こう、刀をこう持つてですね、くりつて回してですね、

『成敗!!』」

「刀どーやって持ち込むんだー」

「退場になりマス」

「確かにすごく暴れん坊だけど……」

「あ、暴れん坊と言えば、可憐ちゃん」

「ん？」

「大正先輩が、帰ってくるよ」

「えっ、兄貴が!？」

少し声が大きくなった。慌てて潜める。前のみんなには、聞こえてない。

「うん。コーチが言ってたよ」

「そっかー……じゃ、なおのこと、チンタラやってられないね。」

「いとこ見せなきや!」

「だね★」

可憐の顔がなお輝いた。目を細めて、笑う。ほんの少し、マネージャーらしいことができたような気がして、嬉しかった。

「よっし!! じゃこうしちゃいられないやつ!!」

飛んで帰つてぐつすり睡眠だつ!!

ダーーーーッシュツ!!」

「わーーーーっ! ま、待つて可憐ちゃーーーーん!」

「おっ!? なんだなんだ青春徒競走か!? 若き血潮の暴走半島か!?

おーし、不肖千里も参加表明ーーーーーい!!」

「えっ!? えっ!? あ、私も! 私もー!! わー!」

「フフツ、かけっこなら負けまセンツ!! ヤー!」

「あ、あーん、ダメだよ、選手には敵わないよーっつ!!」

笑いながら軽く駆ける五人。

と、それを、遠慮無くぶち抜く影一つ。

当人的にカッコイイと信ずる雄叫びつき。

「ふーーーーーヴあーーーーーっ!!」

何事ぞ、と街人達が振り返る。

火の出る思いは後ろの五人。

脳裏にフト、さっきの可憐の言葉がよぎる。

『サッカーのこといろいろ考えてるから、普段バカなんじゃん』

西九条明日葉、守備力なら、チーム一。

### 3 兄貴

次の日も、その次の日も、練習は淡々と行われた。

明るさを取り戻し、以前同様積極的に先頭を走る可憐を見て、周りもようやく落ち着いた。しかし、無論大地は納得しない。これは、ただ以前に戻っただけだ。つまりはようやく、スタートライン。

試合前日。今回は先にスタメン発表。しかし、またも。

「……フォーメーションは前回と同じダブルダイヤモンド4―4―2。

先発は一人だけ変更。場数を踏んでもらう」

静まりかえる全員のまなざし。だが言葉は予想に反する。

「GK、吹田千里」

「は、はい!?」

「不満か? なら」

「い、いいえ! 出ます! 出させてください!!」

「もも。チータが後ろ守るから、ライン上げめで。余裕があるようなら試合中はなこと交替ありうるので、そのつもりで」

「了解だよ」

「明日葉、高いラインに注意するように。苦しいようならユミ姉にスイッチするから、ももには言うな」

「はい! 頑張ります!!」

「マキ、いつもどおり。アクセントで出すかも知れない。後半はいつでも出れるように」

「ハイナー!!」

「以上だ。質問は」

「はい！」

「千里」

「……えつ……と……」

蛮勇と勢いだけで手は挙げてみた。が、全員の視線と、コーチの真剣そのものの眼に、ひるんでしまう。みんなが思ってる疑問を、訊けない。

「……あ、えつと……」

「どうした？ 不慣れなDDでの注意点か？」

「あ……あの、それです！」

「千里の売りは広い守備範囲と大胆な展開じゃないか。」

「いつも通りでいい。思い切って飛び出して、思い切って蹴っていいこう」

「あ、はい！」

「他には？」

「……以上、解散」

廊下、千里、ナナにからかわれる。

「……『あ、あの、それです！』へたれ」

「んなこと言うならナナさんが訊いてくださいよ!!」

「ウチ別に不審点なんか持つてへんもん」

「ありますが言つてましたよ、試合中ナナさん不平不満ボヤきまくつてたつて」

「あつ、あんにやろ余計なことをペラペラと……」

「ほら、不審だらけ。んなことありますが言うはずないじゃないですか」

「カマかいな！ 変な小技ばかり覚えてからに……」

「……ま、ええか。元気なつてるし、そのうち使うやろ」

「……やっぱり、不安ですか」

ナナは眼を細めて、声を低くした。

「……ん。明日なつたらイヤでもわかるわ。」

ピッチ立ってみ。

あのポニーと9の字が前におらんのか、どんだけ頼んないか」

歴戦のMFが、たつた一試合でそう思うんだ……」

「……誰が代わりとか、そんなんちやうねん。

あるべきものがそこにはない。

ラーメンにチャーシューが無いねん。肉みそとか、ハムとか、毛ガニ一匹とか、そんな問題やないねん」

ナナらしい例えだったが、気持ちにはわかりやすかった。

「サッカーは……フォワードやなあ……」

あの陽気なナナ、誰もが認める日本屈指の司令塔が、詠嘆口調でしみじみと言った。よほどしゃべりたかったのだろう。愛のいる同学年では話せない内容でもある。

「何言ってるんですか、ナナさんがしつかりしなきや、誰が攻撃組み立てるんで

すか。頼みますよ、MFはラーメンの麺なんだから！」

「へへ、ま、そやな。あんたかて気いつけや。ロングフィードはええけど、おらん選手探したらあかんで。GKは、ドンブリの底の龍の絵やねんから」

「そんなしょーもないもんですかああ!？」

「アホ言いな！ GKの存在感はなけりやない方がいいチームに決まってるやろ!？ ポリースメンと一緒や!!」

「いや、まあ、理屈は、まあ……」

「なーんにもせんと全部終わった最後に出てきてにつこり笑う、これがGK理想の姿やね。まさにドンブリの底やろ?」

「まあ、結果としては、まあ……」

「……人のこと心配してる場合やないやろ。頑張りや」

最後は、自分に言い聞かせるように言った。

千里も、頬を引き締めた。

「……はい。ナナさんも」

「ん。勝と」

「ハイッ!!」

——可憐は、特段落ち込みもしなかった。もちろん嬉しくはないが、大地コーチがもし、何かを自分に求めているとするとするなら……まだ自分は、何も手にしていない。それを探し当てるまでは、呼ばれなくても当たり前である。

焦っても仕方がない。真剣に練習に取り組んで、試合でも、真剣に応援して真剣にアップして、一つ一つ、真摯に取り組むだけ……

そんなまっすぐな思いの他に、もう一つ身体を軽くしていた理由がある。

「兄貴が、帰ってきてる」

兄貴——大正太陽。たいしょうたいよう 高校生Jリーガーにして、ユース代表のエースを務める、

若き天才ストライカーである。上町大地の……だけではなく空堀や高安を含めた二年の面々の、大切な友人でもあった。

大地がコーチに就任してから、忙しい合間を縫って、ちよくちよく顔を出してくれる。

ポジション同じ、スピードで勝負するスタイルも同じ、直情径行気味、燃える  
と手のつけられない性格、ピッチ上での「暴れん坊」っぷりも似ていて、美形、  
と言つていい顔立ちもどことなく似ていた。

誰言うことなく兄妹みたいだ、と言われて、当人達も半ばそんな気になった。  
「可憐」「兄貴」と呼び合つて、随分可愛がり、また、懐いている。

秋の日は釣瓶落とし。夕陽が沈む。制服に着替えて、みんなと別れた。もう居  
ないだろうとは思つたが、オレンジに染まる校舎を、一回りしてみる。

——やっぱり、そう上手く行くものではない。それらしい人影は、なかつた。

それでも可憐は、探し回れるほど近くに兄貴がいると思うだけで、なんだか頼もしく感じられて、嬉しかった。太陽はチームや代表の遠征で、学校に来られるのは稀である。

“……しようがないか”

ふと思えば、報告できるようなこともない。『今、スタメン落ちです』。そんなこと、恥ずかしくてとても言えない。と思うと、急に逃げ出したくなった。見つかからないうちに……駆け出した。

「カレ」

「あ……」

世の中は、うまくできてるのか、できてないのか、わからない。

駆け降りる階段、上から、懐かしい声が降ってきた。

「兄貴」

「よお。久々」

一瞬前までは逃げだそうと思っていたのに、顔を見ると顔がほころぶ。ぶつきらばうな挨拶も太陽流。こっちの方が、心が沸いた。

「可憐ちゃん」

「あ」

その後ろから、見慣れた笑顔二つ。キャプテンと……コーチ。

「まだ、帰ってなかったの？」

「あ、はい、あの、えっと」

もちろんとがめるでもない、大地の優しい問いかけだったが、今、ちよつとコーチとは、話しづらい。

「大地君……無粋だよ」

「ブスイ？」

「ほら、いこ。ここは若い二人に任せて」

「あんだよそれ」

「あ、あーあーあー、そっか。可憐、それで残ってたんだ」

「いちいち口に出して確認しなくていいから。ほらほら」

「あ、うん、あ……」

コーチがキャプテンに袖を引かれる。

若い二人に任せて、つてなんですか。

美緒さん最近、おぼちゃん化が激しい気がする。ナナ・ウィルスの感染力は恐ろしい。

大地、太陽に向かってにつこり笑う。

「太陽」

「あんだよ」

「可憐をよろしく」

「あんだよそれ」

「私からもよろしく」

「だから長居もなんなんだよそれ」

「兄貴兄貴」

「ん？」

「要は兄貴が邪魔だつてことでさあ」

「あーっなるほどな。俺としたことが」

「ちがうつて」

「ほら、息<sup>ひ</sup>びつたりでしょ？」

「帰つてくるたびにコンビネーションが上がってる気がするぜ。長居、大地は任せた」

「はいはい」

「何を任せるのさ。美緒もテキトーな返事はやめてよ」

「全部だよ。俺とお前、一緒に風呂に入った仲だろ？」

「「ええーっ！？」」

「合宿所の大風呂にみんなが入っただけじゃないか」

「ほっ……ちよつとドキドキ」

「負けてると思いました？」

「お風呂は、まだ……」

「『は』ってなに、『は』って。なにかもまだだよ」

「『まだ』ですか！　じゃ予定が!？」

「ん？　い、いやだから……」

「あはははははははははははははははは……」

「あははははは……」 「ふふふふ……」 「はははは……」

太陽がバカ笑いをはじめたのにつられて、みんなで笑った。

「はははは……いや、ミラクルズはいいよ。」

居心地が、いい」

「えへへ……コーチのジントクつてヤツですよ」

「いや、みんながいいヤツだからだよ」

可憐の言葉に、大地は微笑んだ。

その笑みに、曇りはない。

そんな当たり前のことも改めて見ると、ホッとする。

「さ、いきましょ」

「だね」

「あ、別に俺達はいーんだぜ」

「だから兄貴、向こうが良くないんだって」

「あ、そか」

笑いながら、今度は相手にせず背を向けて去る二人。キャプテンはわからないけど、これからコーチはまだ、部室で相手の研究に没頭するはずだ。それも、邪

魔したくはなかった。

——二人で、なんとということもない話をして、グラウンドへ出た。一段下がったサブグラウンドに降りる階段。

そこは、沈む夕陽が、巨きく見える。

太陽はなんの気遣いも要らず、肩肘張らずに話せる可憐が好きだったし、可憐も、あらゆる面で自分の先を突っ走ってる太陽と話すが、なにより貴重な時間だった。

下手なアイドル文字通り顔負けの美貌と実力、今や太陽はマスコミも騒ぐ人気選手だが、小学生時分からそんな位置にいたがゆえに、チャホヤにすでに嫌気が差している。特に耳障りな金切り声だけを上げに来る女性ファン、というのがかなり嫌いであった。彼女たちの中には、サッカーそつちのけで太陽にフラッシュ

を浴びせる者も居る。悪いとは言えないが、面白くはない。クラブのマスコミ対策指導で我慢に我慢を重ねているが、切れそうになることも多い。ところがまた、その野武士のようなブツキラボーに、女の子達は熱を上げる。上手くゆかぬものである。

“……ミラクルズは、いいよ。”

大地やカラは、いい思いをしてる”

二人の仕事の大変さはさておき、もう一度そう思った。話を通じる、同じ言葉を理解する、というのは、それだけで楽しくまた得難いことだった。

少なくとも可憐はじめあそのみんなは、自分を一人の人間として見てくれる。サッカー選手でもなく、嬌声を上げる偶像でもなく。

和泉や美原を見る。ちよつとバカなこと言おうと、アゴをしゃくりあげるようにしてケラケラ笑う。そんな経験、よそでしたことない。

居心地のいい時間に、沈む夕陽と一緒にたゆたっていた。

よい湯に浸かるように、身から心から、余計な何かが抜けていくようで、いつまでもこの時間が続けばいい、とさえ思った。

ふと見ると、可憐はその横顔を夕陽にさらして、静かに口をつぐんでいた。顎のラインが美しく濃淡を分け、まとめた長い髪が、風になびく。すべすべの長いうなじの後れ毛が、栗色に輝きながら泳いでいた。

“……きれいだな”

素直にそう思うと、

とくつ。

軽く胸に、なにかが鳴った。

でもそれより……見たこともない、見せたこともない可憐の表情。

憂いのような、寂しさのような。

気になった。だから訊いた。

「……カレ、なんか、ヤなことあったのか」

「えっ!？」

もつと気の利いた言葉が出ないものか……

太陽は自分につくり来た。でもしようがない。だって俺、バカだし。中身が通じりゃいいんだ、通じりゃ。

「わかる？」

……じゃないや、別に、ヤなことじゃないんだけど……ううん、ヤなことなんだけど、あれ、そじゃないな、えと……」

「使ってもらえなかったのか」

「エッ!？」

「やっぱりな」

「そ、そうだけ……ど……どうしてわかったの!？」

「バカ、俺だつてFWだぜ。FWの落ち込む理由なんかそれしかねえだろ。あと

点が獲れないか。それで落ち込むお前じゃないしな」

「あ……うん」

「理由は何だ。スランプか」

「えと、あの……考えたんだけど……いっぱい考えたんだけど、わかんない」

「わかんない!? 情けないヤツだな、そのぐらい」

「だってあたしバカだからわかんないんだもん!!」

可憐が大声を上げて身を乗り出した。太陽、慌ててそれを押しとどめる。

「まあ落ち着けて。」

「なにもんなこと言っていない、ちゃんとよく考えたのか?」

「考えたよ! どこが悪いのか、一生懸命考えた!!」

点は、点はね、ちゃんと取ってた。その前の練習試合でも取ったし、運動量もね、ちゃんと、あたし的には、めいっぱいめいっぱい走った。そりゃ、終わったらすぐ倒れるってほどじゃないけど、でもかなりいっぱいだったよ! パ

スも出したし、前から守備もした。くー先輩とのコンビはいつもどおりだったし、あーにボール貫うだけじゃなくてね、あーにもボール出してね、それで、それで……」

半ば涙目で一気に吐き出す可憐に、うなずきながら聞いてやる。

不調でもない。酷使を避けるわけでもない。さっきの様子なら、感情的に衝突したわけでもない。テストも何も、今はもう、練習試合ではない。

それなら、それならなぜ大地は、可憐に試練を課すのか。

F Wに、いや、『エースストライカー』になによりも耐え難い、ベンチという試練を……

閃光のように、太陽の脳裏に一つのシーンが浮かび上がった。

暮れなずむ紫の光に乗って、眼前に、ピッチが広がる。

照らされた美麗な芝。

百年の歴史を刻む巨大なスタジアムが、揺れに揺れていた。

絶叫が絶叫を呼び、その渦の中で太陽は、立ちすくんでいた。

味わったこともないような屈辱。侮蔑。無能を見る目。知らなくてもわかる汚

い言葉。発煙筒。ボトル。泣き顔、いくつ。

その中に一つだけ、戦う顔。

光を曳いて伸びるパス。

触れる。静寂。

スペインの、夏。

不意に全てが戻ってきた。全ての不快と、全ての後悔。

なのに、忘れたくない一発、忘れるわけにはいかない一発。

たいせつなこと。

これから、おそらくは一生、背負わなければならない十字架。

それを俺は……大地に、教わった。

逃げ回っていた、子供だった俺に、投げつけるように、それを背負わせた。

だが、遅かった。

それを大会前、いや一試合早く見つけていれば、俺はチームを、そして大地を救えたかもしれない。

噴き上げる溶岩のような熱さが、太陽の心臓を突き上げた。

不意に黙り込み、まるで試合中の険しい顔になる太陽に、可憐は驚く。

無理もない。太陽は今も、あの試合を、戦っている。

いつの日にか。

いつの日にか、あの連中を、あそこで、倒す。

俺のゴールを叩き込んで、勝つ。

「……あ、兄……貴？」

「いや。可憐」

よく透る可愛い声に、我に返った。

妹、がいたりや、こんな感じなんだろう。

暑苦しくてバカだけど、素直で、真剣で、やたら可愛い。

俺はこういうヤツが、大好きだ。

だが太陽は、兄ではなく、先輩FWの顔を取り戻す。

「……それはやつぱり、自分で考えなきや駄目だ」

「あ……うん……」

いずれ負わねばならぬものだ。

ならば、早ければ早いほうがいい。

上手く行けばそれを知らぬ者よりも頭抜ける。

そして駄目なら……やり直しも、効く。

俺はほんの少し早ければいいと悔やんだ。

だがそれを貰ったおかげで、今の俺がある。

“だから、だよな”

気づいた。

大地は、俺の失敗——そして大地の失敗——を、繰り返さないために。

“アイツ……”

呆れかえる。計算に、スケールに。

俺は成長していると思いきや、薄ボンヤリと校庭の眺めるアイツより、ずっと先を歩いていると思っていた。いつかケツを叩かなきゃならない、と思いがついていた。

とんでもない。

「はは……さすがだぜ。」

ちつくしよー……やりやがる」

頬が緩み、目頭が熱くなる。頼もしき友の振る舞いに。

そうでなくつちや、アイツじゃない。アイツはいつでも、いつの間にか、一步先を歩いている。

負けては、いられない。

「……よつと」

「？ きやつ!？」

いきなりしゃがみ込んだ太陽が、可憐のカモシカのような美しい脚を無遠慮に撫でた。

「あつ、あつ、あに、あにきい!？」

「……ふーむ……」

「あの、くすぐつ、ちよつ、あつ、きやつ、にやつ、にゃくくくくく!!」

まるで美術品でも鑑定するかのように、か細く触れるだけの指先に、走るぞわぞわ。同級生なら蹴りの一つも入っているが、そこは尊敬する先輩の特権である。と、言つてももちろん太陽も、スケベい理由からではない。

「いい脚してるぜ、可憐」

「あ、あ……はい、あの、あ、ありがとう」

「カレ、この脚、なんのためについてんだ」

見上げる深い瞳で、太陽が問う。恥ずかしさと混乱が襲つた。

可憐、初めて兄貴が日本中からきやあきやあ言われている理由がわかった。この人は……なんて綺麗なんだろう。

「あ、歩くため」

「ぶーーーーーっ!!」

もう一つの理由。そんな夕陽の似合う美男子の癖に、その長い髪振り乱して唇

尖らせて、クイズ番組のブザーの真似をしてくれる嬉しい人は、そうは居ない。

「俺がそんな質問してんだから状況見て考えろ！」

んなこと言つてつからバカレンつて呼ばれるんだよ！」

「あ、は、はい！」

えと、えと、その、あの、えつと、あの」

兄貴だつてたいして変わんないじゃん、と言いかけてぐつと呑み込む。

マスコミに事実以上にサッカーバカ扱いされ、オモチャになつてゐる太陽の方が（もちろんそれは皆の愛情の裏返しでもあるのだが）可憐の言うとおりに「ソレ」っぽいのだが、今はちゃんと考えないと怒られる。

それより、早く答えてそのなでな指を離して欲しかった。

くすぐりたいし……恥ずかしい。

この状況で、あたしの悩みがあれで、相手が兄貴で、脚のことで……

「あ、わか、わかった！」

サッカー!! サッカーするためについてる!!」

「…………ふむ」

相変わらず撫で回していた手が止まった。拳にする。立ち上がる。それが上から、落ちてきた。

こん。

「あ、あた」

「五十点」

「そ、そんな低いの!？」

「バカヤロ、半分もやってんだ。大サービスだと思え」

「う、ううう…………」

と言われても、なにがなんだかサツパリわからない。両手のグーで頭を抱えて、泣き言を呟いた。まったくもって、怒られた子ギツネ。

「そ、そんなこと言われても…………ぜんぜんわかんないよう…………」

「……ま、俺がやれるヒントはここまでだろ。」

「これでもやりすぎだつてアイツに怒られそうだよ」

「兄貴く〜」

「情けない声出すな！」

「お前それでもフォワードか!!」

「あ、あうっ」

「また出し過ぎかな」

心中ちよつと舌を出す。でもさすがバカレン我が妹、ぜんぜん気づいちゃいない。

「いいか、いつも言ってるだろ!？」

「フォワードは死んでも諦めるな！ フォワードが諦めたら、そこでミッドフィールダーもディフェンダーも脚が止まる」

「……」

「返事は!!」

「はいっ!!」

「終了の笛も交替の笛も耳に入らないぐらい、とりあえず走れ。とりあえず頑張れ。それをまずやらなきや駄目だろ。」

お前、ベンチの試合で、ちゃんとアップとかしたか!？」

「えっ……えっと」

可憐が自らの様子を思い出す。

太陽も、「その時」を思い出す。

『太陽ーーッ!! なにやってんだッ!!』

いつでも出れるようにしておいてくれッ!! 頼む!!』

たのむッ!!』

肚の底から心の声。

太陽は、真心の言葉が人を突き動かすことがあると、その時初めて知った。身体が勝手に立ち上がって、走り出した。

頭も心も、空っぽだった。

「……ぼ、ぼーつとしてて、たぶん……してなかった」

「んなフワード使う気になるわけねえだろ!？」

「なに考えてんだ!!」

「あつ、あの、だけ、だけどあた、あたし、べ、ベンチはじ、初めてで」

「んなもん理由になるかああ!! ある程度進めば周りが始めただろ!？」

「えつと」

「それも見てなかったのか!？」

「う、うん……」

「カーツ……情けねえ……」

「でつ、でも、でもやり方とかわかんなくて、あ、アップのじゃなくて、試合中の、ベンチの」

「バカ……お前ねえ……訊きやいいだけだろ!? みんな仲間じゃねえか! cottんだっているんだし!! お前、何様のつもりなんだ!!」

「……お、俺様、カナ?」

「可憐!!」

「はいいいい!!」

ただでさえ成功率の低い可憐の数少ないギャグは、ホットな真夏の太陽には逆効果だった。

ま、一番大事なところ以外なら、たぶんいいだろ。

「あのかな、可憐。FWは、競争が激しいんだ」

「は、はい」

「いいか、一つか二つだ。

一つのチームで、いや、一つの国で、必要なフォワードは、一人か二人しか居ない。試合に出れなきや意味ないし、そもそもMFだつて前の方の連中はそこそこ点獲りやがるからな。ミラクルズだつてそうじゃないか。どこからでもいくらでも点が獲れる。下手をするとFW抜きでもチームが成り立つ」

可憐は懸命に想像してみた。

なるほど、ありすとナナさんを前線に、エレとマキ先輩を左右のアウトサイドMFに、キャプテンとユミ姉さんをセンターMFに置けば、なんの問題もなく成り立った。しかも堅実そうでいいスタメンである。

「……悪くないかも」

「だつ……」

ガツクリきた。このバカさ加減がコイツのいいところと考えられなくもないが、なんか、躰の悪い小犬叱つてるような気がしてきた。

言つても聞かない。なら、殴る。

ぽか。

「い、いだ！」

「バカヤ口お、サッカー選手が自分の居ないスタメンなんか想像するな!!」

「はっ、はいい!!」

小犬が背筋を伸ばした。

……なるほど、可憐にはこれだ。あとで大地に教えておこう。

「今はいい。けどな、もし仮に代表にでも入ってみろ。

もつと上手い選手がいる。あるいは、もつと実績のある選手がいる。

そこでいきなり先発を獲得するのは、『お前みたいな天才』でも、難しい」

「はい」

「そんな時ベンチに座るだろ。いいか、どんなにいいFWだって、そこから先発の座を掴まなきゃなんないんだ。たまたまテストしてくれる幸運なんて待ってち

や駄目だ。ベンチに座つたら、いつでも、最初の1分から使ってもらえるように、準備するんだ。もちろん、一〇〇%でだぜ」

「……」

熱が籠もった。

太陽は、一つ上の五輪代表に招集され、そして使われなかった経験も持つ。遠い異国の地に何十時間も飛んで、そしてただベンチに座った。誰がどう見ても自分よりヘタクソなFWの姿を九〇分、見つめた。

可憐は真剣そのもので耳を傾ける。実感の籠もる言葉は、響く。

「……そいつを、今から教えてるんだと思うぜ、大地は。

なんてたつて怪我でもしないかぎり、お前にミラクルズで出番が無い、なんてことは今後あり得ないからな。これがラストチャンスだ」

「……」

なるほど。理解はした。

だが、納得はできない。

そんなことなら、口で言ってくればわかることだ。

あたし、いくらなんでも、そんなバカじゃない。

「……あ、納得できないって顔だな」

パチパチッ。

太陽の大きな掌が、可憐の左の頬で鳴った。

「う……そ、そうじゃないけど……」

「カレ、大地のこと、好きか」

「……へ、へ!？」

「大地のこと、好きか、って訊いてる」

「は、へ、あ、あの、いや、そういう、あの、いや、いや、そういう、ちが、違  
うこともないんだけど、あの」

「くくくっ」

抑えきれずに、笑いが漏れた。

目の前にいるのはふにやふにやと身を振る名前通りの可憐な少女で、兎を狩る狐のようにピッチを駆ける様など、想像もできない。

この連中は、いつもこうだ。

センス抜群洒落つ気たつぷりの和泉流乃も、ツンとすました秀才美原はなこも、こと話題が上町大地になると、こうなる。

オモシロイ。

意地悪を、続けてみた。

「嫌いなのか」

「キライじゃないよ!!」

「じゃ好きなんだろ」

「えっ、あの、あの、いや、その、好きとか嫌いとかそういうのじゃなくて」

「じゃどーゆーのだよ」

「いや、その、こ、コーチと、選手という関係で、であつて」

「コーチと選手にだつて好き嫌いはあるだろー」

俺、今の五輪代表の監督大嫌い。

はい、可憐は、ミラクルズのコーチが」

「す……あの、そじゃなくて、あの、えと」

「嫌いなのか。ま、ヤツも自業自得だな。冷たい仕打ちしてんだからな」

「だからキラ伊じゃないつてば!!」

好き!! あたし、コーチ、大好き!!」

両手をグーにして、目を閉じて素直に吼えた。

「……じゃ、信じてやんなきゃ」

アイツは……人を大事にするヤツだ。可憐のことを、そりゃ、サッカー中心か  
もしれねえけど、いっぱい考えてくれてるつて。

だからアイツが出した宿題は……」

もう一度拳をつくつて、軽く振り上げた。

可憐は逃げない。まつすぐに、太陽の目を見つめていた。

……とん。

くしゃくしゃつ……

頭の上でグーがパーになって、可憐の強い髪を二往復、した。

「自分で解いてやらなきゃ。」

……好きになつてもらえないぞ」

「……」

返事の代わりに、首が折れるかと思うほど強く速く深く、うなずいた。

その言葉は、自分にも跳ね返ってきた。

あまりに強い、可憐の瞳に反射して。

……だよな。

監督悪く言う前に、使わざるを得なくなるまで……

力をつけよう”

妹がいるとすれば、こんな感じなんだろうか。

だとすると、妹が欲しいと思った。

賭けた思いがそのまま跳ね返ってくる、可憐のような、妹が。

「兄貴……ありがとう！」

「礼なんか言うな。お前まだ、何もしてねえだろ」

“俺も”

「けど」

「いいから早く行け。こんなところでいつまでも油売るな」

「うん!! あの、次の試合さ」

「バカ、保護者じゃあるまいし、そんなしみつたれた地方予選なんか観に行つて

たまるか」

「おー、じゃ本戦は来てくれるの?」

「ま、国立の決勝戦ならな」

「ベスト8が一番面白いつて言うよ!」

「わかった。準決と二つ観てやる」

「やった!! 兄貴、大好き!!」

「じゃほつぺにチューだな」

「へっ!」

「なにウ口たえてんだ、お前、アメリカ行くんだろ!」

挨拶だ、挨拶」

「え、そ、そか、あの、えっと」

「こうすんだよ」

そつ、と頬を合わせた。

唇は、触れもせずに、寄せるだけ。

「!!!」

それでも刺激が強すぎたらしい。

真つ赤に茹で上がって、湯気が出た。

カクカクと、手とアゴが意味もなく上下している。

「いいから行けって」

「……あうあうあうあうあ……あうあ……」

んぐつ、いつ、行きま、行くよ、あ、あに、あ……

たつ、太陽先輩」

ロボットのようには百八十度巡って背中を見せた。

「ほら!!」

その背を押してやる。

柔らかく前へつんのめった可憐は、その勢いそのままに、走り出す。  
三步、四歩。

その身体の動きが、脚が、いつもを思い出させてくれた。

“……あたしは、走んなきゃダメだ”

振り返る。

優しい目をした、彼がいた。

“……コーチと、同じだ”

その発見に自然と笑みが漏れた。

大きく手を振った。

彼は小さく、手を振った。

一つその場で跳んで、走り出した。

もう一つ嬉しいことがある。

兄貴が、あの、憧れの眼差しで見るとは思えない雲の上の存在が、言った。

『お前みたいな天才』

あまりに嬉しくて、嬉しさが立ち上がってくるのが遅れた。

今になって、身体を満たす。

そう、あたしは、あの、大正太陽に認められている。

「やるよ、兄貴」

そのことに礼は言わない。

まだあたしは何もしてない。それに……

言うなと言われたし。

——太陽は、子ギツネの背中見送る。

走り方一つ、バネの伸び縮み、天性。

日本人のそれではない。

“……大丈夫だろ、アイツなら。

気づくはずだ。

素質なら、俺以上だろうしな”

自分に驚く。

少し前なら、そんな謙虚など、思いもしなかった。

あの男のヤな影響か。

それもある。

けれどもそれだけじゃ、なかった。

太陽は鈍い。

そういうことは、ちつとも知らないし、わからない。

知らず、右手を頬にあてていた。

さつき可憐の頬に合わせた、右の頬に。

『太陽先輩』

不思議と、妹と思いにくくなっていた。  
けれどもやつぱり、欲しい、と思った。

∞

その頃。



次からチャーシューだけは入っていないメニューにしよう

「あーん、あかんあかんあかんくくく。」

むしろ丼一杯チャーシュー麺くくく！」

「だめだだめだだめだ」

「ううくん、カラちゃんのい・け・ずくん」

「バカだな……」

だから、お前がそれ以上太らないようにするためだろ」

「あつ……」

そ、そないウチのこと考えてくれてんのん？」

「つたりまえだろ。」

俺が考えてることは、いつも一つさ」

「カラちゃん……」

「ナナ……」

「だーーーーー！！」

暑苦しいから他でやってーーーーーっ！！」

「あ、おはな、あんまりヒス起こすとまた血圧上がるで。怖いで、血圧は。ある日突然やで。ポテ、言うたらしまいやで」

「血圧にはネギやな」

「へえ、そんな効果あんの？ ネギラーメンにすんの？」

「ちやうちやう。白ネギをこう、そのまま頭に巻くねん。」

宴会のサラリーマンネクタイのように」

「あ、それオモロそ。きつとおはなにぴったりや！

大将ー！ 白ネギ持つてきてー！」

「あいよー！」

「そんなもの巻かないわよッ！！

マスターもいいですよッ！」

「首に巻くのが風邪予防やったっけ？」

「青ネギだったかなあ……」

はなを弄って遊ぶナナと空堀に、残りの面々はゲラゲラ悶絶していた。

一度は空堀のアタックにお断りを入れたナナだったが、いつの間にか、なし崩し的に、しかし当たり前のように、くつついていた。公式発表は無いが、まあ事実上ソレである。なんとといってもお年頃、「ウチはサッカーにしか興味ないねん」と言いつつ、実際異性と近づいてみればそこには当然、サッカーと違うドキドキがある。なにせ相性抜群、夫婦漫才も磨きが掛かる一方だ。

今日のメニューはいつものように好き勝手ではない。ご当地一番店『山嵐』の大将と天下の料理オタク長居美緒が協議研究の末編み出した、適度なカロリーであっさり、胃腸に負担を掛けないカーボ・ローディング（炭水化物貯蔵法）に最適なラーメンである。ただ、いかにもな外見だと食欲を無くすので、できるだけ

脂を抜き軽い味をつけた特製チャーシューものつている。

それを残していた、ただ一人。

笑い声も、他より小さい。いつものシルクハンカチを取り出して、口周りを小さく拭つている。

「……あれ？ プリンセスもうお終い？」

こくり。

「じゃウチそれ貫う〜！ ええやんな、愛吉！」

こくり。

「だからよしなさいっつーとーだろ。キャプテンのカロリー計算とか全部台無しやんけ！」

「ええねんええねん、我慢して精神的ストレス溜める方が身体に良いって！  
その方が絶対太る！」

「ムチャクチャや〜！ あ、だからほら、止めとけって！」

「あ、えーこと思いついた」

「な、なんや！」

外見に似合わず、彼女は小食でもない。特に身体に悪いところも見られないと  
なると……理由は。大地、ひとりごつ。

「プレッシャーか……あんまりそんなタイプじゃない、と思っただけだな」

ナナはたぶんそれを知ってる。だから、場が冷めないように騒いでくれている  
のだ。そこは初めての掴まり立ちはサツカーボール、というベテラン、こういう  
光景を嫌と言うほど見てるのだろう。もちろん大地も、そうである。

本人も食欲の無さ、その理由に、気づいていた。

「……責任が、重すぎる……」

負ければ、つまり点が取れなければ、明らかに自分の責任である。

先発は何より一つのことをやらねばならない。時間を稼いだり、守備に走り回ったり、むやみなシュートを撃つてればいいというものではない。

何がなんでも、点を取る。

完調の可憐を押しつけて出れる実力ではないことは、自分が一番よく知っていた。

エースは十一分の一、などではない。可憐なら、一人で何点でも取ってみせるだろう。

“いつしようにけんめい、やるだけ”

何度もそう言い聞かせた。できないことはできない。可憐のような派手な技術も能力もない。チャンスボールを待ち、敵のボールを奪い、ただ無心にシュートを撃とう。それだけのことだ。

……だが、そう思えば思うほど、追い詰められていく。ストイックは、それ自体が麻薬になる。自家中毒を、起こす。

「あ、ほなこうしよ？ あんたが食べるんやつたら、ウチ食べへん」

「ん？ ああええよ別に。では姫君、ちよつとドンブリを失礼……」

「ちやうねんちやうねん！」

「なにが」

「ウチが食べさしたげんのん！」

「なんのプレイや!!」

ゲラゲラゲラ……

大地、笑いながらしかし、心では笑えない。

上手くすれば、これさえよい経験になる。この厳しい経験が、ピリリと引き締まった、いつでも頼れるスーパーサブを生むかも知れない。

「だめだめ、公序良俗に反します。召し上げ」

「あゝ、みーちゃん、それは酷いわー、ウチとカラの、赤いチャーシューがー」

「そんなもんで結ばれてたないなあ」

「結ばれてないよりはマシやろ!？」

「まあ……」

「なに、結局ノロケ話？ たまんないわよね、みー」

「いいこと聞いちゃった」

美緒が素早く、手元に引き寄せたチャーシューを箸で小さく割った。

「いかん」

みんなが思う間も無く。

「……はい、大地君あゝん」

「やられた~~~~!!」

しかし、思索に耽る大地は、知らず、それを無視する格好になる。

……僕は、鬼か”

そう思えてきて、少し、自己嫌悪。

指揮官というのは、こんな因果な商売なのか。

しかし……結果それでチームが上手くゆくのなら、それも愛のためでもある。

……というような無茶苦茶を考えるようになったか。

職業病……いや。僕のことはいい。

気持ちを尽くして、わかってもらおう他ないさ”

ただ考え事してるだけだとわかっていても、口にしなかったのは偉い。

いいぞ大ちゃんその調子だ、と、誰もが思った。

しかしそこはキャプテンである。そんな常識人共が予想だにしない拳に出た。

「……しょうがないねえ。もう、甘えんぼーなんだから。」

……ぱく」

もぐもぐもぐもぐも……

〃……そつ、それはアレか!? ひよつとしてアレなのか!? 〃

〃さつすがみーちゃんやー! 一枚どころか五枚ぐらい上手やーツ!

今度やろーーッ! 〃

〃ま、まさか……し、しかしみーなら、みーならやりかねないツ!! 〃

〃はっ、初めて見るよーーっ! 〃

〃いつ、いくらなんでもそれはマズイんじゃないのーーっ!?

公衆の面前よ!? 公衆の、面前よッ!?

〃………ごきごき〃

も……

心の絶叫届いたか、美緒は上目遣いで咀嚼を止めた。

「……冗談だよ」

だーーーーー……

六人が、トロけるチーズのように、ソファにトロけた。

その大きなリアクションで、ようやくアホ大地が現実に戻ってくる。

「あ、あれ、どしたのみんな」

「……大地が悪い」

「せやな。最初ので反応しといたらウチらかてこない追い詰められることなかつたんや」

「ピンチをチャンスに変える……まさにボランチの仕業……」

メモしておこう」

「いやですよおはなちゃん、たいしたことないですよ」

「キャプテンはスゴイよー。ボク、いつも感心してばかりだよー」

「??????」

「ふふふふ……」

頭の上クエスチョンマークいっぱいの大地上に、美緒は、キャプテンは、笑って言った。

「……楽しみだね。明日」

流乃もいつもの顔に戻って、笑う。

「だね。明日も走るよー」

愛、あんまり左出ないでね、あたしのスペースが無くなるから」

「うん！ ボクもどんなFWが出てくるのか楽しみだよ」

「どんなのが来ても、ぶっ潰してやる！ 1点もやらないからね！」

「へへ、物騒やなあ。蘭、燃えんのはエエけど、赤は貰ったらアカんでー」

「つまんない」

「おはなちやくん、あんたはいつもどおりベンチから寂しく戦況を見つめときや  
」

「うつ、うつきいわね！ 明日はもーさんの代わりあるかもしれないうって言うて  
たじやん、ね、コーチ！」

「ま、ね」

「フィードの時、愛の長い髪は目立つからいいのよ。」

縦一本一発ゴール、センターバックの醍醐味はこれね」

「ひとまかせやなあ、蘭吉みたいに自分で撃ちいや。あんたのあてずっぱーみた  
いなフィードにいちいち走ってられへんやんなあ、愛ちゃん？」

「……いいえ」

愛にしては、大きな声を出して首を振った。黄金のように光る髪、揺れる。

嬉しい。

みんなの気持ちが。

「ボール、ください。」

シュート、撃ちます」

それしかできないけど、なら、それをやろう。

いや、やるしかない。

きつぱり言い切る愛を見て、流乃とはなこが小さく目配せをした。蘭がにっこり笑って、ナナが繰り返し返す、美緒の言葉。

「……明日は、楽しみやな！」

そしてみんなで、うなずいた。

大きく、強く。

〽

“しまったー……”

可憐は非常灯のグリーンが薄ボンヤリ照らす、暗い廊下を走っていた。

午後十時、夜の学校。慣れてはいたが、やはり気持ちのいいものではない。

講堂、文化祭に向けて練習する演劇部の明かりが無ければ、諦めるところだ。

ユニフォームを部屋に忘れた。2ndの濃紺。練習試合では1stのピンクばかりを使っていて、存在すら忘れかけていた。しかし使うとなって持っています、というザマは避けたかった。特に今は。

“あつ……”

ようやく辿り着いた部屋、ドアの隙間、部屋の明かりが漏れている。理由は考えるまでもない。声がした。

「……大地君、早く」

「わかってるよ、美緒」

「いかー！ーん！ 夜の学校は、いかー！ーん！ーん！！」

夜の学校でなくてもイケナイことを想像して飛び込みかけた可憐だが、続く会話をすんでのところで止められる。

「……もう十時を回りました」

「わかっているわかってる。もうちよつともうちよつと」

「もう……」

入りづらくなつて、その場で立ち聞きみたいになつてしまう。

データ整理とその検討に没頭するコーチを、キャプテンが連れ出そうとしている。ただ……。……

「優しい声」

母のように優しく問いかける長居先輩に、言葉とは裏腹に、苛立ちも腹立ちも無かった。むしろ、ずっとこのままでもいいような響きさえ感じる。

あんな声で諭されたら、あたしが男の子だったら飛んで帰るのに。

その気持ちを受け止めて、穏やかに穏やかに応える上町先輩。

誰もいないからそう聞こえるのか、夜だからそう聞こえるのか。

“……いいなあ……”

あたしも、コーチ……じゃなくて上町先輩に、あんな穏やかな声、掛けてもらいたい。きつと羽毛布団でくるまれたみたいにあかふかのいい気持ちになるんだろう。それから、できれば、本人にもくるまれ……

「キャプテンこそ、早く帰らないと駄目じゃないか。」

ほら、僕のこととはほおっておいて、早く帰った帰った」

「はい、わかりました」

「お。珍しく素直」

「私はいつでも素直ですよ。」

「じゃ、送ってください」



「理由はそれじゃダメでしょコーチー！」

「……は。しょうがないか。じゃ駅まで送るよ」

「あ、それじゃ意味ないよ、一人で帰れる」

「いいからさ。息も抜きたかつたし」

「あ……」

「……しょうがないね。今日は貸しとく」

「借りとくよ」

「ふふ」

「はは……」

「おつ、おしやれだー！ なつ、なるほど、そういう会話も必要なのカー！  
大人の世界は奥が深ーーい！」

一つ年上の二人の言動に一人大興奮の可憐だが、影と空気の動くのを見て、慌てて暗がりにも身を潜めた。二人が出て行つて、去つた。手でも繋げば飛びかかつて噛みついてやろうと身構えたが、ごく自然に並んで歩いていった。

明かりそのまま、シャツ腕まくり。コーチ、まだ続ける気だ。駅まで行つて帰つて十分はかかる、この隙に。

飛び込んだ部室のコーチの机の上、様々な資料が散乱している。どうしても気になる。丸と矢印とその他記号で埋め尽くされた、フォーメーション試行錯誤のシートが折り重なっている。電源の入ったビデオ。近くのテレビが、「入力2」という文字だけを写していた。

目につくのは、真ん中に開かれたノート。丁寧な、素晴らしく読みやすいコーチの文字が、びっしり黒々と埋まっている。

そーつと、それを覗く。

どうやら……試合前の作戦と試合後の反省をまとめたノートらしい。

一番新しいその左のページには、明日の先発とフォーメーションが描かれ、相手の特徴が簡潔に記されていた。

『大学生チーム。この地区では強豪の一つ。レギュラーは経験者多数。最初の山場』

気になる記述。

『千里の先発の場数には適切だと思った。後の四人はほぼ途中投入を考えているので、実戦が場数（ケガは無いように祈るしかない）』

眼前が、真つ暗になった。

“……後の四人……”

忍様はI s t G Kだから……マキ先輩、ユミ姉さん、美原先輩……あたし。

“……やっぱり、コーチは……”

“……ええい!!”

ぶんぶんとポニーテールを振って、要らない妄想を吹き飛ばした。

この際だ、あたしの足りないものを見つけよう。先発した最後の試合、あれは自分なりにはいい戦いだつた。あれで足りないもの、それが答えだろう。

ページを前に繰った。あつた。

左ページにさつきと同じ試合前の作戦、そして右ページ以降に、試合中の気づいた点。まずは全体の総評があつて、チームの総評があつて、敵チームの分析があつて、そして個人個人の評……

嬉しかった。

『可憐』

誰よりも、自分の名があつた。丸でくくって、先頭に。

そして……行数も、その下の誰よりも多い。

“……えへへ、でも、FWだしね”

『いつもどおり、よかつた。パーフェクトと言っていい』

“……パーフェクト……あ、あれ？”

『得点機を完璧にモノにする。それを当たり前のようになしながら、しかも、味方をも活かす。素晴らしい』

“……え、えへへ、えへへへへ……”

『ここまで自己犠牲精神に溢れるFWは稀だろう。コンビを組むFWや、OM（攻撃的MF）は、これほど頼りになる素晴らしいFWとはまず組めないことをよく言っておく必要がある』

“う、うひゃ、うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ”

『特にありすに送ったクロスは実に正確、その抜群のスピードを活かしてアウトサイドランナーに仕立てたい欲すら頭をもたげる。』

『万能だ。なんと万能なのだろう』

“にゅひよひよ、にゅひよひよ”

身体をくねくねとくねらせてくすぐりたい快感に酔う可憐に、しかし、次の文

章が目に入る。

『……だが、このままでは、それが彼女を苦しめることになりそうだ』

『……？』

『FW、いやストライカーは、万能である必要などどこにもない。

あればあつた方がいいのはもちろんだが、その前に一つだけ、やらなければならない仕事がある』

『……ひとつだけ』

『それさえできていれば、後は何一つやらなくても、誰も何も言えなくなる。

残りは全部その後だ』

『……』

『そして可憐にはそれができる。事実、している。

だが、最近の彼女は、それを見失っているようにも思う。

能力のあまりに高い彼女は、それを意識せずともできるのだ。

ありすに送った左からのクロスで、ハッキリと思った。

だから、それをもう一度見つけ直して欲しい』

“……あたしが、なにかを見失っている……

なにを……”

『そのために彼女を落とす。

それができるのは、彼女抜きでもなんとかなる今のうちだけだろう。

理解しにくい仕打ちに、彼女はめげるかも知れない。

だけど、これだけは彼女のためだ。

彼女が、その大切なことを忘れない本物のストライカーに育って欲しいから

だ』

〃本物の……〃

『次は我慢しよう。叫びたくなる交替の声を我慢しきろう。』

万が一にでも負けることはない相手だが、もし、もし負けたとしても……

僕が身投げでもして詫びれば済むことだ。

可憐のためなら、安いものだ』

〃……〃

ぶるぶると、身体が震えた。

身投げでもすれば。

可憐のためなら、安いものだ。

涙腺が緩んで、視界が歪む。

決意を示す大げさな表現だ、それはわかっている。それはわかっているけれど、

でも、ここにこう、書いてくれた。

こんなことをコーチに書いてもらえる選手は、

いや誰かに書いてもらえる人間は、

一体どれぐらい居るのだろう。

コーチは、あたしのことを、こんなにも、こんなにも真剣に思ってくれている

……

『……僕が音を上げててはお話にならない。

僕も頑張るから、頑張れ、可憐』

噴き出るようなめらめらしたものが、全身を覆った。

こうまでしてくれるコーチに、こうまで考えてくれるコーチに、

自分は一体、何ができるのか。

簡単なことだった。

まるでコーチの言うとおりであった。

知っていたし、わかっていたつもりだった。  
だけど。

なにもわかつちや、いなかった。

最終行、赤で書かれた文字、そのページでどこよりも目立つ行が、  
目に飛び込んだ。

『可憐は、誰が何といおうと、ミラクルズのエースストライカーである』

ドン、と身体のどこかで、なにかが弾けた。

震えながら、ページを元に戻した。

駆け出す、ロッカー、ユニフォームを取って、走り出す。

闇の中、駆け抜ける。

校舎を出た。校門を出た。

大通りの車列の光が、瞳ににじんだ。

走れない。

袋のユニフォームを取りだして、何度も拭った。

ごしごし、こすった。

駅に着いた。

誰彼構わず、泣いた。

嗚咽が止まらなくて、涙が止まらなくて、

ただベンチに座って、ユニフォームで顔を押しさえた。

吸い込まれる嗚咽、吸い込まれる涙。

しゃくりあげて握りしめると、目の前に、自分の背中。

大きく描かれた「9」の文字。

あたしは、なんて、バカだったんだろう。

簡単すぎることだった。

当たり前のことだった。

だから、忘れていた。

その文字は、その数字は。

そう、あたしは。

「……点を獲る、人」

それだけのことだった。

そしてそれを、人はこう呼ぶ。

誰が否定したって構わない。

誰に笑われたって、構わない。

だつてコーチは、だつてコーチが、そう、呼んでくれた。

もう一度顔を、その数字に埋めた。

息一つ、上げた瞳に、涙はもう無い。

電車が来た。

立ち上がる。ベンチを蹴つて、立ち上がる。

雄々しく、凛々しく、前を見つめて、立ち上がる。

そう、あたしはストライカー。

ミラクルズの、エースストライカー。

ベンチになんて、座つては、いられない。

## 4 逆風

次戦、同じ丸珠公園第二球技場。今日もまた、多くのサポーターが、ミラクルズの大勝模様に期待して集まった。応援歌が響き、フラッグが舞う。

しかし。今日の敵はそう簡単な相手ではない。

大学の体育会系。普通にやれば間違いは無いが、侮れば足元を掬われる。

それを知る選手達の顔にも前戦のようなお祭り気分は無い。顎を引き力のこもる目が、並んだ。

“……このチームは、敵が強い方が、いい”

踊るような気持ちで、大地はそう思った。つまりそれは、どんな相手にも食らいついていく姿、つまりそれは、戦えば戦うほど、強くなる。

踊る気持ちももう一つ。

9番だ。

目の色が違う。表情かおが違う。身体のキレおが違う。オーラが、違う。

“見つけたか”

飛んでいって、そう問いたかった。

だが、それは問うてもしょうがないこと。

答えは実戦で、事実で見せなければならぬ。

9番もそれをよくわかっていた。

淡々と準備をし、ただ己の身体を寡黙に暖めていた。

そのこと自体が証拠だった。

何よりも、そして誰よりも頼もしい。

大丈夫。絶対に大丈夫。

今日は、勝てる。

直感が叫んだ。大地は素直に、それを信じることにした。

“さあて……おもしろく、なりそうだぜ”

キックオフの笛が、鳴った。

ss

今回は、簡単には点が入らない。

相手は、こちらが強豪であることを充分に承知していた。この大応援団を一目見ればわかる。そしてそれに対応する術を知るぐらいには、自分達を鍛え上げていた。

全員一丸の守備意識。とにかくボールを奪われたら、それを奪い返すことだけ

に全力を注ぐ。徹底して、早めに、高めに。そして取れたら、それを丁寧に丁寧に繋いで、じっくりじっくりチャンスを待った。

自分達は格下だ。その謙虚な気持ちに着実なプレーに、一つ一つを大切にするプレーに、献身的なプレーに結びついた。

ボールポゼッション（支配率）なら相当の自信を持っているミラクルズと、互角、いやそれ以上の時間、ボールを持った。ボールを持つ、すなわち勝利ではない。しかし、ボールを手にしなければ、点は取れない。

試合の動かない、時間が続く。

敵の真つ赤なユニフォームが躍動する。それに合わせて2ndを着る、珍しく濃紺のミラクルズ。違和感は、見た目だけではない。

チーム内でも、温度差があった。ナナや美緒といったサッカーのベテランや、胡桃やエレーナといったアスリートス達はじっくり構えていた。あれほど走りまわるプレースタイルは、九〇分持たない。足が止まる頃を見計らって、仕留めれ

ばいい。が、ありすや明日葉、それに愛といつたあたりは、彼我の差歴然にもか  
かわらず動かないスコアに徐々に焦りを感じ、無理をした。

その微妙なズレが、またズレを生んだ。

ボールをもらいに下がりがりたがる愛やありす、最前線で構える胡桃との距離が開  
きすぎて、前へ運べない。そこで奪われて運ばれる。また取つても、前の選手が  
また下がってくる……

“あかんあかん、ズルズル下がったらあかん！”

ナナ、手を挙げてキャプテンからボールを貰う。単独のロングドリブルを仕掛  
けた。軽やかに真つ直ぐ、右タッチを駆け上がる。

久々のチャンス、前線がゴール前へ殺到し、エレと流乃までが攻め上がる。

しかし、慌てすぎた。

それこそ必死、三人のヒットマンを送り込む敵陣。右コーナーフラッグごと押

し倒されるナナ。しかしファールもない。ラインを切つてもいない。

蹴り出した。

それは、フィードというような計算されたものではなかった。おそらくはただのクリアだろう。

ただ、長かった。FWに、届いた。

飛び出そうとする千里、落ち着いていた。

これこそあたしの見せ場。

だからこそ、耳に入った。

「だいじょうぶ!!」

そのFWすぐ後ろから、ももと蘭とが挟むように駆けていた。

足はあまり速くない。ドリブルもそんなに上手くない。飛び出すリスクを負わなくても、私達で充分処理できる。

千里は、素直に任せた。

それも少し、千里らしくなかった。いつもなら声が聞こえても本能のまま飛び出しただろう。やはり、どこかうわずつていたのかも知れない。

蘭が右の肩を当てた。バランスを崩すFW。ももがその瞬間、右から左足をすい、と伸ばして、ボールをタッチへ追い出した。

足元をこんがらがらせたFWは、土埃を上げて一人で倒れた。

完璧なディフェンスだ。

ミラクルズはみな、自画自賛した。

が。

ピーーッ。

笛が響いた。主審が駆け寄って、指を指した。それは……

ペナルティ・スポット。

見ればペナルティエリアすぐに選手が倒れていた。しかし、それは。

——普段ならそんなことなどやったこともなかった。

あまりに完璧にできた守備を理解してもらえなかった、絶望のようなものに、ももは突き動かされた。

あれをファールだというのなら、なにをどうやってボールを奪えばいいのか。しかも次の審判の動作が、ももを奈落に突き落とす。

胸ポケットを探る手。

出される黄色の紙。

突きつけられる。

「ダイビングです!!」

「あつ」「いけない」「だめだ」

止める間もあらばこそ。

ももが審判に迫る。説明がしたい。これは百歩譲って認めるとしても、次に同じことをやられたら、試合にならない。

普段大人しく優しいだけに、理不尽に怒りを覚えると、止まらなかった。

大声で、叫んだ。

「それもエリアの手前です！　まず足はかかっています！

私は、手も足も触れていません！！

どこをどう見てそう判断されたんですか！！」

しかし、美緒がその大きな体を後ろから掻き抱いた時には、もう、遅かった。

黄の紙を持ったその手がもう一度ポケットに入つて、もう一枚の紙を取り出した。赤い色をしていた。

黄の紙が出て、赤い紙に代わった。

「……ひどい!!」

「地方予選だ。こんなものさ」

「……」

思わず腰を浮かして飛び出さんばかりのベンチを、指揮官の一言が素早く鎮めた。彼の言うとおりのサッカーは、レベルの低い審判にも、敵に味方する審判にも、耐えなければならぬ。

それはいつも、大地が口を酸っぱくして言っていた。審判には、何があろうと逆らうな。もし何か言いたいことがあったら、まず僕が言う。

それにしても厳しすぎる。二枚目は異議へのカードだが、多少のことは流すのが慣例だ。杓子定規は構わないが、それをやるなら、審判にも無謬が求められる。この審判は、その厳しさを知らない。

「……しかし本番になると思いもしなかったことが起きる。」

蘭ならともかく、まさかもが、しかも暴言で二枚目を貫うなんて

そもそもがももは異常なまでにクリーンなDFで、イエローはおろかファウル  
の笛もほとんど吹かれない。大地としてはむしろ、ディフェンスリーダーならば  
もつと汚らしく、敵FWを精神的に痛めつけるようにやつてもらいたいと思うぐ  
らいだ。

ももがナナに送られて、帰ってきた。目を顔を、伏せている。

「……もも。気にするな。ノーファウル。見てたよ。」

ももは何一つ、悪くない」

「……」

左手を握ってあげて、長い髪を二つ叩いた。

見上げる。

その言葉に、堰が切れた。

「……………ご……………めんなさああい……………」

ごめ……んなさああああい……

「いい。いいから。」

裏で、千里、応援してやって。ね？」

「……あぐつ……うぐつ……ぐつ……」

退場、ベンチでの応援すら許されない。それを思うと、情けなさとし訳なさ  
で、涙が止まらない。

空堀が飛んできて、抱きかかえるようにして控え室への通路を歩かせた。普段  
あれだけ大きく見えるその背中が、小さく丸く、泣いていた。

見たこともない守備大黒柱のその様子に、ベンチの心も千々に乱れた。

だが、今はピッチ。

千里はPKが、忍ほどではないが得意だ。

このレベルの敵なら、自滅もあり得る。

しかし。

悪い流れは、簡単には止まらない。

キッカーは、この試合ここまでの流れを、充分に承知していた。ゆっくりと助走して、無理をせず力まず、できるだけのシュートを落ち着いて放つ。

スピードはないが、見事にコース一杯一杯。

反応はできた千里の指先をかすめて入ったのが、また、悔しい。

ピーーーーーッ……

得点を告げる長い笛。

風雲急を告げる音。

DFリーダーと先制点を、一気に失った。

そしてこれから六〇分もの長い時間を、一〇人で戦わなければならない。

“ちよつ……と気合いを入れないと、まずいね”

じつくり構える予定だった美緒やナナの肩にも力が入った。  
プランは崩れた。何がなんでも、早めに追いつく必要がある。

どうしようもなく不安が膨らんだ古都は、たまらずコーチを見た。  
驚いた。

その横顔には、うつすらと笑みさえ乗る。

“ピンチなのに……”

なんだろう、このコーチの余裕は。

“……あつ、もしかして”

振り返る。すぐ近くに、可憐がいた。身を乗り出すように浅く腰掛け、手を前にくんでピッチを睨む。

まるで同じ表情をしていた。

うつすらと、笑みさえ。

なんの理由もないのに、古都の身体にも力が湧いてきた。  
いや、理由は明らかだ。

指揮官とエースストライカーが笑っているのだ。  
なにを、不安に思うことがある。

見る間に可憐が立った。素早くジャージの上を、脱ぎ捨てる。  
何も言わずに、ベンチ前から走り出した。

“たのもしい!!”

喜びさえ湧いてきた。

なるほど、これならコーチも、何の不安も感じないはずだ。  
むしろこの逆境をいかに弾き返すか。それこそが、面白い。  
マネージャをやっててよかった。

こんなワクワクは、ピッチに立ってでは感じられない。

躍動する9番をしばらく、見つめていた。

55

そのまま、前半を終わった。

美緒が最終ラインに下がって守備指揮を執った。エレーナが底、ありすが左に開いて、4―3―2。キャプテンが守備専任をやる以上、間違いは起こらないが、ただでさえ一枚足りない中盤、守備負担がエレ一人にかかって、思うようにボールが収まらない。そこをまた、早いチェックで奪われ続けた。

膠着。

後半一息入れても、戦況は変わらない。

もちろん、このままでは終われない。

大地、いよいよ動く。

「はな！」

「ハイッ！」

「3バック中央、DFコントロール！」

得意のフラット3で極限までラインを押し上げろ!!」

「っ……ハイッ!!」

はなこ、一瞬驚く。負けてて、一人少ない。それをあまり慣れない3バックしかも中央コントロールを私に任せて、さらにラインを限界まで上げろと言う。

無茶苦茶だ。

全幅の信頼を置いてもらえるのは有難いが、戦略が見えにくい。

「……流乃とナナの両アウトサイドを低めに張りつかせてガードさせる。慌てずに、ボールを徹底的に回せ。キャプテンとエレもすぐ前に置く」

「オーソドックス3―5―2系でダブルボランチ？」

「そういうことは……１トップ？」

「Yes」

「勝って逃げ切るならともかく、負けてるのに？ このぐらいの敵なら、キャプテン一枚で底は充分、エレを落として攻撃布陣を提案」

「却下。」

FWの枚数が少ないからって、守備的ってわけじゃないぜ」

「……なるほど」

「ちらり、とコーチが目を配った先に、9番がいた。それならば確かに、FWが一枚少ない方が前線にスペースがあるかもしれない。それは、考え方としてはありだ。」

「こつとん、交替申請を」

「ハイッ！」

「2番美原はなこ、交替は……」

## 14 番森之宮胡桃

「……ハイッ!!」

「……そこまでやる? エグイよ」

「ここを、乗り越えてもらわなきゃならない」

1 トップ放り込みなら誰がどう考えても胡桃を残すべきだ。ただでさえ過酷な  
1 トップ、フォローする相手も居なくなれば、愛には荷が重い。

大地は愛に、当て馬をやれと言う。

可憐投入まで、システム固めのために、敵陣で孤立無援の戦いを繰り広げて、  
油断を誘えと言っている。

全員の見ている前で、誰の期待も得ぬまま、独り、ボールを追えと。  
プライドも何も、あったものではない。

だが、それが、今彼女にできる、一番の貢献だった。

理屈はわかるが、納得はしがたい。はなこは思わず、嫌味を吐いた。

「あなたとは、結婚したくないわね」

「どうして」

「ボロボロにされるから」

「はなこ」

不意に、大地の目が曇った。胸に左手を当てて、無理に笑おうとする。

はなこは、酷く後悔した。

「……一番に、僕がボロボロになる」

「……ごめん」

唇を噛みしめて、背を向けた。

言葉には、魂がある。勢いに任せるものではない。

上町大地を一番近くで見てるのは、私なのに。

一番辛いのは、コーチだった。

謝罪は、プレーでするしかない。

——胡桃が帰る。コーチとは目も合わせず、背に触れる手を振り払うように、真つ直ぐベンチに帰つて、由美子の隣にどきりと座る。俯く。顔は、上げない。古都もタオルと飲み物を差し出して、止まった。由美子はその頭を、ぐしゃぐしゃと撫でる。

「くー。作戦だよ。悪くなかった」

「……」

何も答えず、震えるように両手で顔を覆った。

「一人少なくならなきゃ……」

「違う」

震える、でも強い声で遮った。

「……点を、取ってない」

「くー……」

私は、甘えてた。

だれにもカレにも甘えて、結局、なにひとつ出来ずに、ベンチに下がった。サッカーはバスケットじゃない。1点も取れない。つまり何もできないことがある、怖い競技。しかももう、二度とあそこへは戻れない。

もう、何も、できない。

「……大丈夫。胡桃は頑張った。胡桃の木が実をつけるには、時間がかかる」  
「……」

由美子にしては詩的な表現をした。

点を取らないだけでそこまで落ち込まれたら、私達MFはどうすればいい。点  
はみんな取るのである。そして、取らせるものである。

「大丈夫。ウチのチームは、必ずその実を、取ってきてくれる。」

ほら！ 見よう、試合！！」

ぐしやぐしやっ……汗で貼りつく胡桃のネコ毛を撫でて、二人で一緒にピッチに目を戻す。

まさにはなこが、吼えて言葉で蘭と明日葉のケツを叩いていた。異常に高いライン。ハーフウエーを超えんばかりの勢いである。

選手が、フィールド半分に密集していた。

「そうか！」

密集地でのボール回しには、技術がいる。密度が上がれば上がるほど、テクニックとスピードがモノを言う。その差が、はつきり出る。これには、死んでもラインを下げないはなこが適任。

横目で見た。胡桃はもう、血走るとような燃える瞳で、その様子を睨み付けていた。美しい猫目に、ボールが光る。

少しずつ空気が、流れが変わってきていた。

“負けるもんか”

思うと、立ち上がった。

胡桃、もも。二人と違って、私こそまだ何もしていない。  
ガードグラスを掛けた。オレンジの視界に、闘志が湧く。

「……カレ！ 手伝う!!」

「ハイッ!! お願いします!」

踊る9番に駆け寄った。

今私にできるのは、できるだけホットなコイツを、ピッチに送り出すことだ。  
脚を取った。上気した伸びる脚に、力が、気持ち、生命が宿る。

“大丈夫”

そう思った。何の根拠もない。いや、根拠は……この脚だ。

途端、焦らしに焦らす上町コーチを、憎らしくさえ思った。

“……この……女泣かせめ”

しかし私達は、この女泣かせに引きずられてここまで来た。

泣かされるぐらいの方がいい。その方が、頼りになる。

目の前で軋み一つ立てず力を蓄えていく可憐の熱い身体を支えながら、由美子はそんなことまで思っていた。

“……いや。”

……んふふ。きつと最初に我慢できなくなるのは、彼ね”

最近少しずつ、そんなこともわかるようになってきた気がする。

悪いことでは、ないだろう。

——ミラクルズはもがき苦しんでいた。

「全員で点を取れ」そう示された選手達は、その力を剥き出しにして走った。愛が吹っ切れたように泥だらけになり転げ回る。今、自分がやるべきことはなにか。

少しでも、ほんの少しでもDFの体力を削り、守備のバランスを崩す。敵最終ラインで回るボールを追いかけ、右から左へ、ハーフウェーからゴール前まで、横幅全てを駆けずり回った。闘志全開、長い髪振り乱してボールを追うその姿に、敵のパスが、荒れる。

はなこは蛮勇とも言うべき無茶なラインを保った。狭いスペースで選手達が、タイトロープのようにボールを扱った。その緊迫の度合いに、敵軍が精神的にも物理的にも、耐えきれない。逃れるように、蹴る。

縦一本、カウンター。

はなこ、もちろん、十八番の押し上げでオフサイドを取った……つもりだった。副審の旗が、上がらない。

舌打ちの間も惜しんで、追った。俊足はなこ、追いつける。

しかしその必要も、無かった。

「いきます!!」

前から指示が飛んだ。

千里、ペナルティエリアはるか飛び出して、FWの足元を襲う。まるでスイーパー、スライディングでボールを刈った。転がるボールを蹴り出すはなこ。教訓込みの果敢な飛び出し、超攻撃的GKの、面目躍如。

……のほすが。

ピッ。

サイドのディフェンスに走ろうとした脚を止めた。

ファウル!? あれが!? FK!? どこが!?

その前に、オフサイドは!?

「……どこを……見てるんだ……」

低く押し殺すその声に、古都の背筋が凍った。

コーチが、コーチが本気で怒っている。

だめ、

審判さん、だめ”

古都は知る。ももの退場に、一番悔しい思いをしていたのはコーチだった。

可愛い選手の完璧なプレーを、理解もできないどころか、悪者扱いする。

それは、コーチとして、許せる出来事ではなかった。

誰しもミスはある。

一度はいい。

だが、何度も繰り返されるのなら……

願い虚しく、火に油。質問するのはなこに対して、スタイルだけは一丁前に、右手の人差し指を振っている。続けざまの誤審、さすがに簡単には引き下がれないはなこに対して、胸ポケットに手を入れた。

“ああ。

だめ。

それは、だめ”

身が震えた。

そーつと、その方を見た。

怒りの表情ならまだよかった。それなら、見たことがあった。

だがそれですらない。

能面のような顔で、少しだけ唇を、噛んでいた。

“……こちらにも、考えがある”

本番は、本当に、怖い。

コーチの噴き出すような闘志を間近で浴びて、倒れそうになる。

黄色いカードがあがった。

古都はもうそれ以上、見ていられなかった。

ぶちん。

音がした。確かに、その音が聞こえた。

「……もう、許さん。」

サッカーを、舐めるな」

抑えに抑えた、地獄の底から響く声。

一瞬の間。

絶叫が響く。

全員が、その声を聞いた。

「カレーーーーーッーーーーッーーーーッ！！」

「ハイッ！！」

その名に、全員が怒りを、憤りを忘れた。

どんな誤審でも、どんな依怙鼻肩でも、したければすばしい。  
要するに。

点を獲って、勝てばいいんでしょう？

「……指示はない。いや」

「……」

可憐の目を、大地が見つめた。

大地の目を、可憐が見つめた。

「……点を、獲ってこい。2点だ」

「3点、獲ります」

バシッ。

それには答えず大地、音がするまでその背を叩く。

その大きな手に押されるように、可憐がピッチに走り込む。

チームが一つになった。

燃える瞳で睨む先は、審判ではなく、敵ゴール。

そしてその見つめる先に、ようやくと、待ちこがれていた、

あのポニーが、あの背中が、あの数字が、戻ってきた。

後半一六分。

F W I I 番堺愛に代えて、9番、此花可憐。

切り札<sup>エース</sup>は、最後に切るものである。

# ミラクルズ・フォーメーション変遷図 (クイーンズカップ・地方予選第2戦)

## System 4-4-2 "Double Diamond"



### Reserve

GK1 忍 DF2 はなこ MF16 由美子 MF19 マキ FW9 可憐

## After 30min... 4-3-2



### Reserve

GK1 忍 DF2 はなこ MF16 由美子 MF19 マキ FW9 可憐  
sent off / DF4 もも

## After 55 min... 3-5-1



### Reserve

GK1 忍 MF16 由美子 MF19 マキ FW9 可憐  
sent off / DF4 もも OUT / FW14 胡桃

## After 62 min... 3-5-1 (#9in)



### Reserve

GK1 忍 MF16 由美子 MF19 マキ  
sent off / DF4 もも OUT / FW14 胡桃 FW11 愛

## 5 切り札

可憐出陣。

そして試合が、動き出す。

躍動感あるそのダッシュの姿に、今までのFWとは違う匂いが漂う。どう見ても若いのに、9番を着けているのも気になる。フレッシュだし、危険だ。できるだけ触られないように、蹴り飛ばしていこう。

おあつらえ向き、はなこは打って変わって冗談のようにラインを下げて、ダルに構えた。明日葉と蘭の距離を離して、だらり、と散漫に見える。

チャンスだ。もう一本。

中央、真ん中から、蹴つ飛ばしが飛ぶ。未だ脚力残す選手達がそれを追う。ポ

ストのFW、その落とすボールを拾おうと、MF陣がサポートに走る。

津波のように、敵陣が押し寄せてきた。

しかしそれこそ、はなこの罠。

次の瞬間、ポストに飛んだFWの後ろから、黒い影が、飛ぶ。

蘭だ。

自分の力が足りないせいで、自分の脚が届かぬせいで、ももを退場にし、胡桃に不本意な交替を強い、はなこにイエローを出した。

ここで獲らずに、どこで獲る。

ガッツ!!

後ろから頭一つ、覆い被さるように、そのボールを勝った。

はたき落とす。

文句一つ言わせないように、いつものようにFWを潰すのではなく、後ろに反り返って、頭から、落ちた。



ベンチに座ると、いつものように座ると、こらえきれなかった。  
涙が溢れた。

我慢した。

来て欲しくないのに、コーチが来てくれた。

早く行って欲しいと思った。

見せたくないから。

そんな自分を、そんな涙を、見せたくないから。

私の役目は、まだ終わっていない、そう、信じたいから。

そして……あの人は、信じなくても、信じさせてくれる。

「……愛、ありがとう。次も頼むぜ。いや……」

「……」

「試合終了まで、一緒に頑張ろう」

「……………はい」

うなずきもしなかった。

涙が零れるから。

「だけでもう、次の涙はない。」

手を覆った手が離れ、影が去る。

やっと潤んだ瞳を、ピッチに戻した。

躍動するチームが、牙を剥きだして敵に襲いかかる。

それは、いつも見てる風景。

そして愛は、いつもの戦いにも、身を躍らせる。

今日は大変だ。

二つの戦いを、やらなきゃならない。



ベンチの皆が、同時にそうした。

私達は、戦っている。

いつものように、戦っている。

ss

……とん、とん、とん。

三つ待った。

これでオフ取られるなら、試合放棄だ。

ダッ。

駆け出す。脚を回す。自然上体が起きる。空気の壁が、頬を歪める。でもただ真つ直ぐ、ゴールめがけて、駆けるだけ。

後ろなど振り返る余裕もないし、その必要も、ない。

歓声も聞こえない。ただ、風の音だけが、耳元で舞っていた。

D Fは脚が止まる。確率がほんの少しでもあるのなら、這ってでも行く。だがあのスピードあの加速、この場合それは、ゼロ。

スッ。

目の前に、白いボールが、降ってくる。

さすが美原先輩、どんぴしゃり。

ペナルティエリア直前、G Kと一対一。

イメージ。

一つバウンド、それを右足。

トラップ。持ち替えて左足。

バウンド、ダイビングヘッド。

選んだ選択肢はどれでもない。

こういう激しいボールは、こういう難しいボールは、だからこそ、得意技。跳ぶ。

人は見る、その背に輝くエースの称号、

涙で染めた「9」の文字。

「シューーツ!!」

落ちきる前に、ジャンピン・ヴォレー。

大胆不敵、しかし正確無比。下向きの運動エネルギーを持つ落ち球の方が、浮

かずに決めやすい。物理法則そのままに、だがそれを実現できるのは、可憐の腕、いや、脚。

ドンツ!!

GKもちろん、予想もできない。できたとしても、反応できない。できたとしても、捕れそうには、ない。

ピイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイツ……

長い長い笛が鳴る。

縦一本一発ゴール、高速フォワードの、そしてセンターバックの、醍醐味ここに極まれり。



数百人の声が一つになって、一つの名前を叫んだ。  
愛情と信頼を、一杯に込めて。

——その名の主は、もう走る。

次のゴールを目指すため、次の得点奪うため。

チームの空気が、雰囲気、イメージが、ガラリと変わった。

何を難しく考えていたんだろう。

極めて簡単なことだ。

ボールを獲って、可憐に渡す。

ただ、それだけのことである。

瞬く間、野獣のように柔らかく力強いドリブルで、可憐が敵陣を切り裂いた。

ファウルで止めようとする足をぐり抜け、掴まれるユニフォームを振り払う。DF全員で囲んで、訳のわからないままボールだけ掻き出した。ゴールラインへ「逃れる」。コーナーキック。

左CK、キッカーは難波鳴海。サイド側ではなく奥側から、右脚で蹴る姿勢を見せる。テクニシャン、巻き込むボールで直接ゴールさえ脅かす。ターゲット、蘭、エレ、明日葉。圧倒的な空戦能力を誇る胡桃と、思い切りのいいヘッドのあるももは居ない。

“……そか、二枚看板抜きか。ほんならウチかてここらで一発ダイレ……いや”

ナナ、見つけた。今日はおそらく、彼女の日である。

“……それでいこ。

いつくでー……いつく”

短い助走、右脚を振り抜いて、倒れた。

倒れるほどに、アウトサイドでこすり上げて、右回転。

ボールは、異様な軌跡でゴールから遠ざかる。敵も味方も、想像もしないキック。いかに意表をつくか。セットプレーの鬼、難波鳴海ならではの遊び心。

もちろん、誰もいない空間へ蹴ったのではない。

真正面誰よりも早くそのボールへ飛び込むは、

またも、そして当然、此花可憐。

ドンツ!!

ヴォレーで叩く。しかし無念偶然、コースが空きすぎていたのが災い、GKの真正面。反射的に出た腕で、弾かれる。真上へと、白いボールが舞い上がる。

それを可憐は、見送る前に、身体を動かした。

跳ぶ。

高く遠く速く大きく、ねじ切らんばかりに身体をひねり、その反動さえ力に換えて。背が反る。脚が伸びる。弓のようにしなる身体が、ボールという名の、矢を放つ。オーヴァー・ヘッド。

ズバアアアアンツ!!

ゴール左上隅一杯一杯、予測も出来ない、出来ても捕れない。

この狩人からは、どうやったって、逃げられない。

“ああ……だめだ……”

GKは、がつくりと肩を落とした。

モノが違う。次元が違う。

さつきまでのリードなど、ただの神様からの配達ミスのプレゼントだ。

こんな相手に、勝てっこない。

「まだ一点まだ一点!! がんばろう!!」

「おー!!」

「ノーチャンスノーチャンス! キーパー、頑張つて!!」

「……」

違う。うちの連中、わかってない。

あのボールに触ればわかる。

あんなもの、捕れっこない。

とにかく、あいつだ。あの9番だけ、なんとかかしてくれ。あとはなんとかする、

あの9番に、シュートを撃たせるな。

しかしそれが一番、難しい。

「……カレ！ ナイツシューツ！！ スーパーシューツ！！

ワングダホーシューーツ！！」

「ナイスキック、ナナさん。よく見えましたね」

コン、と拳を合わせる。誰よりもまず最初にあたしを見てくれる、頼りになる司令塔に。

「お、生意気〜！ へへ、エエ感じやあ！！

今日はセット全部あんた狙いや！！ エエなっ!？」

「もちろんです!!」

「可憐ちゃん!」

「あー!」

「ガッツは!? 出さないの?」

「まだ。まだまだだよ」

「あんな凄いシュート二本も決めてまだ不満なの!？」

「……約束した。3点獲るつて」

可憐の視線を追う。ベンチにたどり着く。それなら。

「……じゃ、あと1点だね!!」

「うん」

「それなら私が……」

深くうなづく真面目な顔に、ありすも笑みを消して、応えた。

これがパサーの醍醐味だ。

頼れるFWにパスを出す、人を、活かす、踊らせる。

「獲らせます」

「……うん!! 頼むよ、ありす!!」

「可憐こそ!!」

——試合の趨勢は、決まったも同然だった。リードを許した相手に、もう攻め手はなかった。逆に自分達のあるべき姿を思い出したミラクルズが、やりたい放題を始める。

一人少ない？ 逆にそれこそ恵みになってる。

大地が睨んだとおり、前線にスペースができる。

ノリにノって手のつけられない可憐。そしてそのマーカーが引きずり回されて出来た穴を、ナナが、ありすが暴れ回った。そうして中央に人が寄ったところを

……

「右サイドチェッカーーーーーッ!!」

この声が飛ぶ時は大抵、もう間に合わない。

気づいてから止められるような脚の持ち主ではない。

狂的サイドアタッカー、和泉流乃。

豆腐を切るより簡単に、走る凶器が左サイド一杯一杯を切り裂いた。

そのまま送る、いつもの癖弾。

シュートかクロスか意味不明、

揺れて曲がって落ちて弾ける、

どこへ飛ぶかは撃った流乃にもわからない。

おそらくは、ボールに訊いてもわからない。

それでも軀ごと果敢に飛び込もうとする可憐。が、そこに、す、と制するがごとく、小さな背中とシュートヘアが割り込んだ。

ありすだ。

さすが変態、まるで磁石の右足に、そのクセ球を吸い付ける。

そして左足に持ち替えて、シューツ……

ズダンッ!!

そのモーシヨンの彼女がいきなり消えた。

いや、土埃を上げて地面に倒れた。出した脚を上に向け、両腕天をかき抱くように、仰向けに転がった。

引きずり、倒された。

ただでさえ小さなありますが、その身体をいっぱいにして屈強なDFの前に戦う姿は、あまりに健気で涙と同情を誘う。それを倒されれば、自然、人間であれば敵味方関係無しに、憐憫の情が沸く。

しかも今日は、さらに。

「……こほっ、こほっ……こふっ……」

背を強打したありますが、息を詰まらせてむせた。殺意に似た負の波動が、スタ

ジラム中のそれが、そのDFに向かった。DF、首を手を振って無実を主張する前に、ありすの前に這いつくばってその身を氣遣った。

罪を認めたも同然になった。

そしてそこは、ペナルティエリアの中である。

ピッ。

これは間違えようもない。ペナルティスポットを指し手を挙げる主審。ありすはそれを見て、ようやくよろよろと立ち上がった。ナナがその身に肩を貸す。エリアの外に連れ出した。

「……助演女優賞」

「えへへ、倒されたのは、事実ですよ？」

「クソ、卑怯や！ なにが『こほこほ』や！ こんなちいちゃい身体でんなことやられたら、笛吹かんわけにいかんやんか！」

「損もしてます。得もしなきや」

「……タヌキ病が蔓延しとる」

「撃ちますよ。可憐ちゃん」

キャプテンが、ボールを取った。1点差、いつもなら、たぶんこのまま。

だけど今日は、ありすの予想通り。

そうこなくつちや、私達のキャプテンじゃない。

「可憐！ キツカー！」

「ハイッ!!」

セットした。おへそを真下にして、きつちり、丁寧に、セットした。

疑問もない。ぬか喜びもない。そして、重圧もない。

ゆつくり下がると、ナナに肩を借りたままのありすが、左の拳をくつ、と握つた。



G K、うなだれる元気すらもう、なかった。

。パイイイイイイイイイイイイイイイイイイツ……

「……3点目~~~~!!」

「ハットトリックおめでと~~~~!!」

「ナイツシューツ！ カレ!!」

さすがに2点リード、周囲の祝福が荒い。だが笑みをこぼしながらも、可憐はつとに冷静だった。そしてありすは、エレーナは気づいていた。

「可憐さん、ガッツは？ P Kだから、無しデスカ？」

「……んと」

かりかりつ、と頬を搔いて、申し訳なきそうにありすを見た。

「あんまりさ、ステキすぎなプレゼントだったからさ、あたしの点つて感じがし

なくて……ごめん、あー。贅沢言つて」

「あ……ううん」

そしてそうこなくつちや、我らがエースストライカーではないだろう。

「じゃあ、もう一本。」

今度のもつと、凄いのを」

「あ、うん！ やるよ、あたし!! まかせて!!」

「なんですか、ありがとうございます」

「あ、あのねエレちゃん……」

説明しかけて、止めた。

この仲間には、たくさんの言葉は要らない。

「可憐ちゃんに、点を獲つてもらおうの」

「あ……ハイ!」

エレちゃんが笑み満面で頷いた。ほら、簡単に通じる。

「……よければ、はつぱちゃんと、ちーちゃんにも」

「もちろんデス！」

「あー、エレ、何企んでるの」

流乃さんから声がかかった。

「えへへ、秘密です」

二人で応えた。

流乃さんは、ちよつと口を尖らせて、でもすぐにニタツ、と笑って、言った。

「……あまり無茶はダメよ。敵さんにだって人生がある」

そんな大げさな、と言いかけて、止めた。

今日の可憐ちゃんなら、何をしでかすかわからない。

“……でも、シュート撃つのは私じゃないもん”

タヌキ病が、蔓延していた。

どんなにどちらが優位に立っていても、試合中何度かは、チャンスがやつてくる。おそらくは敵軍ラストチャンス、つながるボールが、迫り来る。MF二人を経由して、調子に乗って前に貼りついた流乃の悪いクセの後ろを突いて、まっすぐに、駆ける。

ベテラン達の読み通り、もう脚が完全に売り切れていた。それでも久しぶりに、ようやく巡ってきたチャンスに、奮い立たせて走り来る攻撃陣。最後の猛攻、ゴール前三人、センタリングが、飛ぶ。

だが、そのセンタリングに合わせたのは、他でもない。

その中で一番背の低い、しかし、誰よりも高みに届く選手……GK、吹田千里。

密集の中、キーパーグローブ一杯にしてガツチリキャッチ、バランス崩さず見

事に着地。

——千里は、1st GKを諦めたわけではない。守備技術、反応、コーチング、高さ、スタミナ、どれも忍様には敵わない。だけど、それならば、勝てる何かを手にするまでだ。

左脚で着地して、そのまま身かがめて力を溜めてバランスを取る。

ぽいつ。

ボールを浮かせると弾かれたように立ち上がり、そのバネを活かして、右脚斜めに振り抜いた。南米風斜め蹴りパンツキック、重ねた練習と千里のセンスで、距離、精度、文句なし。

「エレーナ!!」

守備に戻ったバックラインと主将の前、左サイドに金の髪が残っていた。風の中揺れるパーフェクトブロンドは、いつも目立つ。

「よしっ!!」

ベンチで大地が立った。守備攻撃の切り替えスピードは、キーパー腕の見せ所。今のプレー以上のものは、望めない。パスターゲットもいい。中央どフリー、次の選択肢も豊富だ。百点のプレー。

ダッ……とん。

ふわっ……

エレーナが、ジャンプ一発胸トラップ、優しく柔らかく、ボールを足元に落とす。九十度だけ、身体を開いた。次のターゲットはもう、決まっている。右脚を支えに、コンパスのように左脚を回した。

「明日葉さんっ!!」

地を這うグラウンダー、ピッチ横切るロング・パス。

「うまいっ!!」

古都が思わず声を出す。元フィギュア選手、エレのジャンプはいつ見ても美しい。その上、あんなに的確なトラップ、右後方からのロング・ボールを左脚前にぼとりと落とす、そんな技があるなんて。その後のロングパス、これはもうエレーナの代名詞。安心して、見ていられる。

だが一瞬、エレはハツとする。キャプテンだ。コースにいる。いつもどおり、いつもならここからキャプテンがボールを配球する。だけど今は。

願う必要などなかった。

美緒姉様はいつだって、あらゆる状況をわかつてる。

ノールック、見もしないのに、まさにボールがその右脚に触れる瞬間、ひよいと上げた。その様さえまるでパス・キック、見る者多くが幻のボールを左サイドに追った。アメフトのQBもかくや、ものの見事なフェイク・スルー。

ボールは右サイド、タッチを走る明日葉へとまっすぐ向かう。

「タヌキ・スルーーッ！」

自身もアメリカンの大好きなマキが、トリック・プレーなら誰にも負けないラテン・アメリカンが、思わず禁句をほとばしらせた。この緊迫の中あのすつとばけプレー、あれは、簡単にできるものではない。

右タッチいっぱいいっぱい、走る明日葉の足元に、ボールが届く。

クンッ！

押し出すように右脚合わせて、前へ強く転がす。そしてそれを自ら、追う。異様に長いストライド、そのくせ跳ねない。ぐいぐいと、滑るように加速する。そんな速さ、見たこともない。

「忍者!？」

サイドバック  
ウイングバック

S BやW Bもやる守備職人・由美子が、らしくもない裏声を張り上げた。自身などとは比較不能な、異次元のスピードだった。音も立てずに水切りのように走る明日葉、キャプテンの指示が飛ぶ。

「ナナ! フォロー!! 右サイド突破!!」

「ラジャーツ!!」

嘘だ。そんな作戦指示を絶叫しては、サッカーにならない。

案の定、その声に導かれるように、ワラワラと敵選手の動線が、右サイドへと、明日葉の前へと集まってくる。ナナはその斜め後ろ、まるで太刀持ちのように従った。

「へいへい、今日は一年の太刀を持ちましょ」

ひとりごちて、右手を挙げて、美緒の真似。

「はっば!! ワン・ツーツ!!」

その声に踊らされるように、一番早く追いついたDFが、明日葉の正面に立ち  
はだかった。縦を切る。守備の基本。

だがこの娘には、そーゆーものは、いやそーゆーものこそ、まるつきりつーよ  
ーしない。

ナナの声無視、聞こえているのかいないのか。

いや、どちらにしても、ここは、これ。

「ふいーーーーーーーーヴあーーーーーーーーーーつ!!」

集まるDFのはるか上を、フィールド斜めに切り裂くボール。

そのロング・ロング・パスの先は……

「おもしろい!」

フィードにうるさいCBもが、観客席横で目を見張った。右タッチラインハーフウェーから、サイドチェンジでもなくシュートでもなく、ゴールマウスやや左、ペナルティエリア左一杯あたりをめがけたロングフィード。人でもゴールでもなく、空間を狙うパス、実に奇抜なアイデアだ。そしてそれが成り立つのは、この人がいるから。

きゆるきゆると音を立てて飛ぶボール、しかしその大飛球ではゴールライン切ってお終いだ。誰もがそう思ったその瞬間に。

遙か高いボールその下に、小さな小さなユニフォーム。

飛び出す、追いつく、そしてボールが、まるでキスでもねだるかのよう、吸い寄せられていく。

21。

ありすだ。

ボールは彼女のおつきの妖精、どこにいたって、飛んでくる。

「……」

胡桃が無言で拳を握る。あのボール、ゴールライン一杯・ゼロ角度・距離少し、私ならきつと次の行動、シュートに備えて四苦八苦する。

そうだ、そんな必要はない。

なんでもかんでも、一人でする必要なんかないんだ。

だってウチには、ミラクルズには、そう私の隣には、いつも頼れるあいつが、いるじゃないか。

ありすの選択に、躊躇は無い。

あの子なら間に合う。それよりも、どんなボールを送るかだ。

……そしてファンタジスタは、いつも一番大きな夢を、見る。

“……おまかせ”

まさにボールが地に落ちんとするその瞬間、ありすの足が、小さな右足が、それをすくい上げた。

ふわっ……

新しい命与えられたボールは、うってかわって、やさしく、おだやかに、たおやかに、ゴール真正面へとたゆたってゆく。

まさかそんな、まともなトラップも難しい超ロングボールを、ワンタッチでラストパスに変換するなど、しかも左足インサイドではなく右足アウトサイドでコントロールするなど、どこの誰にも想像できない。

「時」が、ズレた。

0コンマ0何秒、しかしそのわずかなズレを生み出せるのは、時間の国のアリス、ただ一人。

——そのねじれた時空を切り裂いて、突き進む光一条。

此花可憐。

フィードの瞬間、ただ真っ直ぐにゴール前。

左前をありすが飛んでいく。

一〇〇%間違いない、あーなら上がる。あーなら、上げる。

ありすと一緒にプレーする、それは笑いが出るほど楽だった。

ただ自分は、ゴールへ向かって走ればいい。

その真正面シュートする脚の前へ、あーはいつも、パスをくれた。

今日も、くれた。

スーーーーー……

マークすらくつきり見える静止したボールが、沈む夕陽のようにただ少しずつ下がりゆく。

その瞬間。

閃光が走った。今日の全てが、フラッシュバック。

落ちるボール、弓のようにならせた身体、静止したボール。

光が見えた。

いつもと違って、ゴールの真ん中だった。

そこにはGKがいるはずなのに、光が強すぎるのか、見えない。

直感に従った。

踏み脚を、大地に突き刺した。

左脚と上体を壁にして、マキシマムスピードの運動エネルギー全てを右脚の振り抜きに変換した。それをもつて、  
静止したボールのど真ん中真中心を、  
ぶち抜いた。

音もない。

それは、

GKごとゴール貫く、

レイザー・ビーム。

——このキーパーには本来、センスがあつたのかもしれない。

21番はあえて捨てた。間に合わなければいいし、間に合えば、パス先は一つ。

その9番が、信じがたい勢い、見たこともない速さで、真っ直ぐに突進してきた。その迫力に恐怖した。本能の忌避が、身体を強張らせた。

白いボールが、ふうわり、とその足元へ、じゃれついていった。眼を見た。

9番の澄んだ瞳が、私を、いや、

私の後ろのゴールを、まっすぐに見ていた。

「だめだッ!!」

泣きそうになる絶望と共に、腕が勝手に身体を顔をガードした。背が身体が丸くなる。恥も外聞もない。

殺される。

人は極限に至ると、眼を閉じることさえ忘れるものらしい。

静止したボールは、まったく止まったまま、そのサイズを大きくして、瞬く間

もなく、視界一杯になった。

ガゴン。

腕に肩に顔面に衝撃を受けて、脚が腰が崩れた。

ガスンツ!!

倒れた背に地面を感じると、暗くなった目の前が晴れて、腕の間から、網目模様の青空が見えた。

ボールが、転がってきた。

取りに行くべく四つん這いになろうとして、ただ、顔から崩れ落ちた。

肩から先の感覚が、まるでない。動かそうとすると激痛だけが、脊髄を駆け上ってくる。

諦めた。寝た。

不思議と、さつきまでの焦りや怒りや憤りは、どこにもなかった。  
笑みさえ、こぼれる。

「……ツタアーーーーー……ツッ!!」

真横になった視界の中、その9番が、胸を拳で叩いて、その右手右人差し指を  
振り上げて、跳んだ。

どこまで跳ぶんだ、と呆れるほどのバネだった。

カツコイイ、そう思った。

“……一生の思い出に、なりそう……”

そんなつまらないことを考えていた。

どちらにしろもう、やれることは、なにもなかった。

あまりに凄まじいものを見せつけられると、人は興奮すら忘れる。壊れたGKを代える間、ミラクルズのベンチにも、声はなかつた。

「……あれは……捕れない」

よほどの後、忍が目を細めて、呟いた。真正面のシュートを『キャッチ不能』と白状するほどの屈辱は、GKにはない。しかもPK阻止率六七%、一対一に絶対の自信を持つ忍が、そう、人前で、吐き捨てた。

無回転のボールを真っ直ぐに「押し出す」ことで、全てのエネルギーを、シューターの加速も、ボールの回転も、打撃音までも、ただ推進力そののみに変換する。ただ力任せのシュートではない。可憐でなければ、撃てないシュートだ。

「……無敵」

愛が、輝くような憧れの瞳で、その一部始終を見ていた。

当たり前だ。

GKを吹き飛ばして、いやGKごとゴールに叩き込むなんて、反則技もいいところだ。それならばただ、シュートを撃てば1点入るではないか。

しかしFWにとつては、こんなに魅力的なシュートもなかった。撃ちたい。

素直にそう思った。同じものは無理でも、同じ気持ちで、同じ思いで撃つことはできるだろう。力一杯、真つ直ぐなシュートを。

まずはそれだ。なにより、それだ。

可憐はその大切さを、教えてくれた。

ピッチでは、ようやく歓喜の輪が広がる。

ラストパスとシューターが、高々とハイタッチ。

「ガッツ出ました〜〜!!」

「イエ〜〜ス!! あー、ものすつげーエンジェルパース!!」

「うん!!」

「すごい、すごい、すごいですー可憐さーーん!!」

「ナイスアイデア、はっば! あんたのも最高だったよ!」

「可憐さん、おめでとございマス!!」

「エレ、完璧ロングパス! いつの間にあんなジャンプトラップができるようになったの!」

「カレッツ!!」

「わっ」

後ろから一番の親友が覆い被さった。可憐はヨロヨロと千里を背負って三歩歩めず。ぽかぽかと頭を殴って、ぐしゃぐしゃと頭を撫でる。どちらも今の可憐には、心地よかった。

「くぬ〜〜! なんてシュート撃ちやがんだよっ!! このキーパー殺し〜」

ッ!!

「へへ、ちー、同じチームで良かっただろー」

「くはくは、ちつくしよ、否定できねくはくは!」

「可憐」

「あ……」

みんなの顔が少し曇った。キャプテンだ。怖い顔をしている。GKの負傷度合いを見舞いに行つて、帰つてきた。そうだ、浮かれすぎはよくない。怪我をした人がいる、これは事実。

眉間に皺を寄せ、キツイ目をして、左手を腰に当て、右手で可憐の胸を指して

……小声。

「……ないっしゅー。あと二、三発、撃てる?」

「あ……」

右手の指を、さも注意するように、上下に振つた。顔はまるで、つまみ食いを

見つけたママの顔そのまま。

まったくこの人は、どこまでタヌキなんだろう。

「感触忘れないうちにガンガン撃とう。サポートするよ」

「……はあい」

「ぶっ……」

首をすくめて怒られ顔をする可憐の下手な芝居に、周りが吹き出しかけた。

そしてそんな面白いコトに、首を突っ込まなくてはすぐ死んじゃう星人も一人。

「カレ！」

「わっ」

こちらにも怖い顔で、拳を固めて、上げて、下ろした。

髪の中で、寸止まる。

「……今みたいに回転無い方がエエんか？ それともドライブがエエ？」

「おまかせします」

「うーっし。よーゆーたー。とびつきりのをプレゼントしよーっし」

ぼん、と肩を押して怖い顔のまま離れるナナに、小さく一つ、頭を下げた。

そして敵のベンチに向かって大きく一つ、頭を下げた。

飛ぶように、ポジションに戻る。

試合はまだ、終わっていない。

戦うみんな、出てない、そして下がったみんな、それから、こんな土埃の素人

試合にまで駆けつけてくれるサポートのみんなに、最後まで、戦う姿を見せねば

ならない。それが……

エースストライカーの、務めである。

——再開した。

哀れなのは、準備もしてなかった2ndらしいGKだった。緊張、などとい

う問題ではない。腰が退けて、膝が折れて内股になっている。そもそも敵陣には

もはや、戦意なるものがカケラも残っていない。ただ無事にタイムアップの笛を聞きたい。それだけを願って、使いすぎた脚を引きずっていた。

適度に動いて、適度に邪魔になる。壁よりも味方同士よりも、良い練習相手になった。

明日葉がボールを奪った。

そのまま長いストライドを伸ばして、またもロングドリブルを敢行する。

どうやら癖になったらしい。しかも随分、サマになってる。

速い。上手い。そしてなにより、美しい。

『あれは使える』

大地が思う。本日より期せぬ収穫だ。可憐がなんとかするのは、目を見ればわかった。その素晴らしい結果ももちろんだが、それに加えて一年生それぞれの特長を活かした煌めくプレー、その驚くべき成長にも、心奪われていた。

長い予選を勝ち抜く、自信が湧いた。

“これは使える”

ナナが思う。右サイドは彼女の独り舞台だった。スペースがあるのはいい。しかし、いい加減ここから先は、サポートも、欲しい。明日葉にあれだけのスピードとドリがあるなら、そしてあんな正確な長いキックがあるのなら、これは頼りに、なる。

「はっば！ ワン・ツーツ!!」

もう一度吼えた。

聞いていた。やはりきつききは、聞いてなおありすへのパスを選んだのだ。実に、悔れない。

スぱッ……

切れよく渡される綺麗なボールを、足裏で止めた。前へ、ヒトコロガリ、「シューティン・ループスツ!!」

おもいつくそ、蹴り上げる。歯を食いしばって背を反らし、摩擦で火を噴くばかりの、ドライブ回転。

ボールは、ピンポン球のようなコミカルな軌跡を描いて、ゴール前へ降る。そこに登場、本日の主役。

揺れるポニーテールたなびかせ、惚れ惚れする脚美しく。

絶壁のカモシカもかくや、一呼吸に、跳ぶ。

GKはもう、頭を抱えてうずくまった。

選手が、ベンチが、観客が、固唾を呑んで見守った。

時が止まった。

振り抜く。

ドライブには、これだ。

今日のあたしなら、撃てる!!

「ファイナルドラーイーヴ!!」

ガシュツ!!

トウ、いい感触。思い切り、摺り上げる。

バシユツ!!

……ウウウウウウウウウウウ……

「……あ……」

……ボールはゴールの遙か上。天空めがけて、羽ばたいていった。

全員が、それを呆然と見送った。

ほどなく。

大爆笑、そして笑顔のブーイングが飛んだ。敵も味方もリザーブも、転げ回って腹を抱えて、笑った。コーチも、マネージャーも、たくさんの観客も。あの厳しい主審でさえ、困惑したまま、選手達が笑うに任せていた。

「……いっけね」

イタズラギツネは、バツの悪さに頭を掻いた。

それがまた似合ってて、笑いを誘った。

客席一番後ろの方で、一際大きく笑う男がいた。



## 6 兄と妹？

「……『ヘル・デビル・デス・ブレイカー』とか、どお？」

「やだよそんなのー。なんか悪者みたいじゃん」

「『恋の花咲く電車道』。でや？」

「ナナさん真面目に考える気ないでしょ」

「なつ、何言うてんねん、ゴマ油取れるぐらいめちやめちや頭絞った、つちゅーねん」

「空堀先輩、得意ですよ、こーゆーの」

「うーん……なんつーてもエースの主砲だからなー、これぞ、つてのは簡単には

……」

——ここはいつものドーナツ屋さん。今日はブースにミラクルズみーんなを詰め込んで、和やかに騒いでいる。二人テーブル五つ、向かい側のカウンター席四つ、ベンチ側にはびつしりと詰まって、千里とありすなんか一つの席を二人でわけて、肩を寄せ合う。

目の前に、お茶と山になったドーナツ。

お題は恒例、可憐の必殺技ネーミングである。

フル和風、西九条家ご令嬢がいつものように突叫した。

「『轟天砲』!!」

「それは確かに主砲っぽいが……」

「はっば、凄く迫力あるんだけど、あたし一応女の子……」

「えー、駄目ですかー? 『轟天砲』……可愛いのに」

「あはは……いざとなると出ないもんだね」

「うーん……」

めいめい頭を捻る皆の前に、高い影一つ。

「……うす」

「あつ！ 兄貴ーっ！！」

「太陽先生いらっしやいましたーっ！！」

「わーっ！！」

「げげ、あんだよこれ、満員電車か」

「こつちこつち！ ここ、空いてるよ！！」

「空いてねえよ！！」

「あはははは……」

鞆小脇を抱えて、太陽が顔を見せた。相変わらず、口は悪い。

可憐が腕を取って、ベンチシート、自分の横に座らせた。向こうは愛である。

「……つと、姫君、失礼」

「いいえ。……もつとこつちでも、だいじょうぶ」

「いやいや、そんな、畏れ多い」

「兄貴、こつち来ても大丈夫だよ！ もつとこう、ぎゅーつとこつちに！」

「お前とくつついて俺にどんな得があるってんだよ」

「ぶー!!」

「あははははははははは……」

妙ちきりんな笑いが支配した。

これは、もしやして。

事の推移を、黙って見守る。

「コーヒー、あるよ！ ブラック！」

「頼んできたよ、すぐ持ってきてくれる」

「その間あたしのどーぞ」

「いいつて、んなぐらい待てつて」

「ドーナツは？ どれがいい？」

「わかんねえよ。カレ、カレの好きなのでいーよ」

「えとね、あたしこのオールドファッションが好きなんだけど……食べる？」

「……あんだよ、甘くねえな」

「駄目かな、じゃ」

「いーよ。別にマズかないし。可憐、これ好きなんだろ」

「うん!!」

“ふ、二人の世界だ……”

ひよつとして可憐は、ナナに引き続き「これぐらいで」手を打ったのだろうか。……全国に数千人、いや数万人規模でファンがいるであろう将来日本代表の9番を背負って立つ男を「これぐらいで」というのはいささか語弊があるのだが……

いやしかし待て。ぶつきらな兄と世話焼きな妹といえはそうも見える。いやむしろそう見える。そのへん、以前と変わりない。

「……んで、何話してたんだよ」

「可憐の超ウルトラ必殺シュートの名前、みんなで考えてる」

「ほく。」

「なんか、スゲエシュートだったそうだな」

「えへへへへ、それほどでも……」

「もう、スゴイですよー、大正先輩！ ビデオあります、いつでも部室に見に来てください!!」

「さんきゅこつとん。キーパー、病院送りにしたんだって？」

「おう、見舞い、行った行った。ヒビ、打撲、捻挫のオンパレード。お姉さん普通の学生さんだったから『いい経験だ』って笑ってたけどさ、プロのGKだった

ら選手生命もんだ」

「すみません……」

「いいっていいって、可憐。これが俺の仕事やから。お前さんは何も考えずにガン撃て」

「はいっ！」

「そーですよ、あたしが逆の立場だったら、と思うと背筋が凍りました！」

「忍様も？　ちびった？」

「そんなわけなからう」

GKの話題に武人モードに入った忍、太陽の下世話な表現に少し眉をひそめながら、きつぱりと言いつつ切った。

「おお。じゃ撃たれたら、捕れるかな？」

「……腹案は、無くはない」

彼の意地悪な質問に、少し顔をしかめて、苦々しく答えた。

「……しかし、失敗の確率が高く、何より勇気が要る。難しいのは、確かだ」

「あたしも考えたんです！ 逆手!! こう、ブロック!!」

千里が、ボクシングのガードのように身をかがめて顔面を両腕で守った。

「無理に捕るんじゃないくて、ガツンと弾き返すことだけを狙う！」

「……それは」

太陽と忍が声を重ねた。忍が譲った。

「可憐には無意味だ。俺でも、GKがそんなポーズ取りやコース変えて楽々」

点

「あつ、そーか!! 確かにこれじゃ他のシュートに反応遅れる……駄目か

ー!!」

「たぶん、忍様が考えてるのは」

大地が割って入った。

「毒をもって毒を制す、ってことじゃないかな」

「……そうだな。怖がらぬことだ。

いつでも、そうだが」

「「……」」

静まる場に、まず本人が耐えきれなかった。

「ま、もつともー、可憐とは対戦しなくていいから気は楽なんだけどー!!

あんなシュート撃てる人他にいないしー!」

カジュアルな忍に戻った。知らない人が見れば二重人格ではないかと驚くいつもの変わり身。しかしこれは、この現代社会に生きながら、禁欲と鍛錬の武闘家でもあり続ける、忍のやり方だった。

ナナが両腕を組んで、同意する。

「せやなあ。シュートだけやったら、日本で一、二やで」

「えっ!? 可憐ちゃんのあのシュートより凄いシュートが、あるんですか!？」

「あるよ。」

……リカさんの、『スーパーノヴァ』」

謙遜ではない。可憐、ユースで共に戦ったことがある。ナナと美緒も、小さくうなずいた。古都が補足する。

「聖愛学園二年、背番号13、攻撃的MF、清水リカ選手。

……ユース世代でただ一人フル代表を兼任している選手です」

「ま、ちなみに、ウチがユースの司令塔を譲ったってヤツや」

「だね。宇宙人のような身体能力、息切らしてる所なんか見たこと無い無尽蔵の体力、ロボットよりも正確なプレー、鉄のごとき当たり強さ、そしてその……閃光よりも速い振り抜きの、『見えない』シュート、『スーパーノヴァ』。

現在日本最高の、いえ、おそらくは女子ならワールドワイドベストイレブンの一人。日本代表の至宝だよ」

ここにいる面々も、名前ぐらいは聞いたことがあった。

だが、可憐、ナナ、美緒が揃って最高級の賛辞を送ると、重みが違う。

事実、それは誇張ではない。日本人選手の弱点と長らく言われた、シュートモーションの遅さ、これを克服どころか世界中見渡してもそれ以上はあるまい、というほどに鍛え上げたのがリカだった。『超新星』というその名の通り、ボールは突然いきなり、シュートになる。いつ撃ったかわからないのだから、捕りようもない。さしもの彼女も全シュートがそれ、というわけにはいかないのだが、ともあれ現在のところ、「これ」を撃たれて防いだGKは、存在しない。

勝ち抜いていけば、そんな強豪とも当たらねばならない。

それこそ、聖愛学園との対戦も、ありうる。

「……だけど可憐のあの一発は」

シリアスになる場を、大地が拾う。にこやかに、しかしきつぱり、言い切った。

「スピードと破壊力なら、あれ以上だよ。

自信を持つていい。

間違ひなくあれば、必殺の一撃さ」

指揮官の一言には、さらなる重みがあつた。雲が晴れたように、空気が軽くなつていく。

「けど安心はでけへんで。アイツは……一日ごとに進化しよる。もし対戦したら、あの振り抜きで、可憐以上の重い球撃つて来よるかもしれん。

GK、しっかり頼むで」

「その前にDF、しっかり頼むでー」

「反省してますー」

「あはははははは……」

忍のフリに、大きなものが小さくなつた。自分だけはある得ない、と思つていたレッドカードを貰つたのは、すごくいい経験になつた。もう二度と、油断しない。はなこも蘭も苦笑つた。ももにべつたり甘えていたのは、二人も同じ。

「まつ、点取られたらさ」

太陽が割って入った。

それは、いつも思っている、このすぐ側にいる男に、身体に叩き込まれた真実。  
「FWが、それ以上点を獲ればいいのさ。

な、可憐」

「うんっ!!」

ぐりぐりっ、と頭を撫でる太陽の腕に、そのまま絡みついていく可憐。  
だきっ。

「あー、なんやなんやそこー!

ちよーくっつきすぎちゃうかー!　なんかヤラシイでー!!」

「ほーっといってくださいよお。」

ナナさんには空堀先輩居るんだからいーじゃないですかー!

「ちやうねん、おるとかおらんとかそんな問題ちやうねん、人前でべちやべちや  
ひつつく快感を独り占めするな、ちゅーとんねや!」

「そつちかい!!」

「ということでカラちゃん、はいこれ」

「な、なんや」

すすす、と飲みかけのナナのグラスがスライドしてくる。

「……みつくちゅじゅーちゅいつちよにのむによ」

「それはもう刑罰や!!」

「「あははははははははははははははははは……」」

始まった。ナナは最近、これに凝ってる。

「いつちよにのむによ!」

「かんべんしてくれよもー」

「……わかった。しゃーない。一緒に飲むのは諦めたる。

ほなまずあんた飲み」

「一緒に、つちゅーのは二人同時を指してたんか!? 今まで!」

「つたりまえんかー！ ほれぐいーつといつて！」

「いやせやからやな、わかった、こんど二人の時にしよ？ な？」

「二人の時はいつかつて

『二人の時にこんなことしてもしやーないやろ』

言うて逃げるやん！」

「あははははははははは……」

「なんでもかんでもバラすな！」

君らも笑ろてんと止めなはれ。このノンストップ・浪花<sup>お</sup>主婦<sup>は</sup>を」

「止まりません止まりません、ナナさんのドリブルは止まりません」

「ちつくしよー、千里、覚えてろよ」

いいながら三十六、しょうがなくミックスジュースを手を取った。

「……ううう……」

「はよ飲んで☆ ウチのみつくちゅじゅくちゅ」

「……見るなー」

この人は優しい人だ。ナナさんは幸せだ。そう、みんなが思った。  
ずず……

衆人環視の中顔を真っ赤にしてすする空堀。

なんつーかもー、見てる方が恥ずかしい。

女嫌いで鳴らす太陽、友人に生温かいエールを送る。

「カラ」

「なんや」

「お前……男前だな」

「やかましわ！」

そんなベトベトだが微笑ましいやりとりを見つめながら、可憐はずっと、太陽

の腕に腕を絡めていた。

太陽もそれを、そのままにしていってくれた。

こうしてくつつくと、太い腕、大きな背中、分厚い胸。

熱い身体、きれいな横顔。

……どうしてだろう。

心臓が、どきどき言ってる。

「……うわあつはつはつはつはー！　しょーりー！！」

「なんにも勝ってない、なんにも。いやむしろ俺は負けとる」

ふふふ、あんたはわかってへん。

勝つとる。

なまはんかなことではなかなか勝たれへんあのおぼはんに、ウチは、ウチは今、

猛烈に勝つとる！！

「……はい、大地君、おかわり」

「ん。さんきゅ」

「ミルクは？ 入れる？」

「少し」

「じゃ、お砂糖もだね」

「……ちよつと待てそこ二人」

「はい？」 「ん？」

「なんか今、ウチ、すごいイヤな事実気づいたんやけど」

「なに？」 「どしたの？」

「なんで二人の前には一セットしかティーポットティーカップがあらへんのん？」

「「あー……！！」」

「あー……そういえばそうだね」

アホの方はエエ。ウチが尋問しとんのは主犯格いや主犯や。

「だつてほら、今日狭いし」

「理由になつてない」

「ポット一つで三杯はいけるよ？」

「かけそばやあるまいし」

「んー……じゃあ。」

二人とも、ミルクティーだったし」

絶対ウソや。

芸術的誘導尋問で無理矢理ミルクティーにしたんや。

「……………負けや……………今日も負けや……………」

その場にいる多くが、ナナに同意した。

まったく、このひとは、どこまで、タヌキなんだろう。

「ははは……ナナ、まだ修業が足らねえな。」

……でも名前つつつて、アレが名前じゃないのか？」

「ん？」

「『ファイナルドライブ』つての。」

ほら、最後大ホームランの時に叫んでただろ？」

「あ……」

太陽の問いに、可憐が顔を真っ赤にした。はなこが説明する。

「あ、あれは別の技なのよ。ドライブにドライブ重ねるヤツで、こっちはまだ未完成」

「へえ、じゃ必殺シュート2号の方が先に完成しちゃったのか。じゃ、シリーズなら『ドライブ』つけりゃいいかな」

「ふむ。『前へ』つて感じが可憐にピツタリかも。あとは……」

空堀が顎に指を当てて、考えた。太陽が両手を広げて、大声を出す。

「いや、しかしあれは凄かったぜ!!

ビューーン、つて回転無しで真っ直ぐすつ飛んで行きやがんだ!!

まるでレーザービーム!!

俺がキーパーだったら逃げてるね。あのキーパー、突っ立ってただけでも勳章  
モンだぜ」

「あまりに速くて逃げる暇もなかったんだよ。なんたつてレーザーだからな。

……ん。んー……それ行こうか。太陽、いただき。可憐、

『レーザードライブ』とか?」

「あ……はい! いいです! 強そう!!」

いかにも真っ直ぐな語感とイメージ、気に入った可憐、顔を崩す。

「カラ、どして『レーザー』じゃなくて『レイザー』なの?」

「ん? その方が英語の発音に近いかな、と思っただんやけど。

ほれそこの外国産二名、発音よろしく。さん・はい」

「レイザアー・ドルアーイヴ」

マキとエレが舌を巻いた。片やブラジル育ち日系人、片やロシア&ジャパンの  
ハーフ&ハーフ、無論どちらも英語は非・母国語。

実にうさん臭い。

「ほーんとかなー」

「ま、んなのテキトーでいーだろ。」

とにかく可憐が『レイザードライブ』でバツタバツタと敵のGKをなぎ払つ  
てつてくれんだよな」

「……あにき」

「ん？」

問いには答えず、すごく真面目な顔して、太陽を見る可憐。

心なしか目が、うるんでいる。

「……試合、来てくれてたんだ……」

「えっ!? いやっ!? 俺は……」

「ああ、そういえば!!」

最後『ファイナルドライブ』が飛んでつたこととか!

「『まるでレーザービーム!』とか!

やけに描写が具体的だと思っていたら!!」

和泉と美原だ。二人並んでそんなイヤラシイ目で俺を見るな。

「な〜〜〜んだ、『可愛い』妹を」

「『大事な大事な』可憐ちゃんを」

二人揃ってクツ、と顎をしゃくって、腕組んで、下目で俺を見た。

安物のアイドルユニットか、お前ら。

「「応援しに来てたのか〜〜〜!!」」

……。

……なんだよ俺、何へらへら顔緩めてんだよ!!

「バツ、バカ、違う、たまたま……暇だったから散歩してたら試合やってたんだよ!!」

「でも、見てたのは事実でしょ?」

「最後の最後まで、応援してたんだよね?」

「おつ、応援なんかしてねえつて!! 相変わらずバカだな、つて笑つてただけだつて!」

「バカバカ言つたげないでよ、頭ん中身はあんたとあんま変わらないわよ、太陽」

「そ。サッカーとゴールのことだけね」

「はな、一個抜けてる。」

「マイ・スイー・リルー・ガールのこ・と」

「あつそつかー。」

「くわれんちゆわんのことだね〜〜」

いつの間にこの二人こんな芸風になったんだよ。しかも息までピッタリじゃねえか。

……これだから、女は嫌いなんだ。

「バツ……てめえら、いい加減にしろよ！」

カレ、なんとか言ってやれ！」

「兄貴……」

みんなが目を見張る暇もない。

可憐、両腕、太陽の首に絡めて、耳元で、

「……ありがと!!」

ほっぺに、

ちゅ。

「ッあああああああゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ!!」

「……ちよつ、ちよつ、おま、カレ、てめ」

「なにウロたえてんだよ、兄貴、リーガとか狙つてんだろ？」

「アイサツだよ、アイサツ！」

「つて、てめ、それ、俺の……」

「へへへへへ」

照れた可憐が舌を出して首をすくめた。

アイサツ以上の意味があるのは、その真つ赤な頬がなにより証拠。

そして受ける方も、あの女嫌いで有名なあの人、真つ赤な太陽。

まわりは当然、大騒ぎ。

「カーーーッ!! なんやなんやなんやそれーーッ!!」

そんな、そんなハレンチな行為がこの日の本ニッポンの街中真つ昼間に許され

ると思うてんのかーーー!!

カラ!! ちゅーー!! ここつ!!

「するんかい!!」

ちよー待て、しかもなんで俺がすんねん!!」

「ウチがやってええのん!？」

……エライことなるでえく!？」

につちやああ。

ナナのめつちやエエ笑顔大炸裂。

ヤバイ。このパターンは……

「愛!!」

はなこと流乃が同じ人物指さして、椅子蹴飛ばして立ち上がる。

「「なにか言う前にそのタヌキの口を封じろーーー!!」」

言われるまでもない、いつものシルクハンカチくるりと回して、すでに軽ーくさるぐつわ。

「ふあいふいふん、ふあいふいふん」

「ええ？ なに、美緒」

危ないところだった。もう右手は大地の腕を叩いていた。

「あうーん、みんな仲良しいいかんじくく」

「もも、立たなくていいから、立たなくて」

「くー、あれしよ、あれ！」

「やだ。やだやだやだ」

「あー、壁のぼつて逃げるなー！ じゃエレちゃくくくん！ エレちゃんの白い

肌もちもちで大好きくく」

「うわあやあいああ」

「もつ、目的が、目的が変わってますもも先輩！

……つてわあ！！ マキ先輩ー、ちよつ、わー、それは、そこは、ちよつと、

あああ？」

「チサトもカワイイヨーッ!!」

「あつ、あた、あたし、されるよりするほうがー」  
わいのわいの。

瞬く間に、ハートで一杯、ピンク色の地獄絵図。

「わ、わ、みんな、みんなすごいことになってます!!」

「あー、ドサクサまぎれや！ あんたも意中の人にガンと行つたれ！」

「え、ええ!？」

ちら。

意中の人を見てみた。

いつもどおり、微笑みながら暴れるみんなを見つめている。

ほんの少し、視線をずらした。

視界の隅に、紅蓮の炎がちらりと映えた。

ぎゅいーんと目をそらした。

戦う前から完敗である。

“……ああ……まだまだまるで敵わない……本物には”

——じゃれ合いながら、ふざけ合いながら、いつしかみんなで笑っていた。

終わった戦いを味わいながら、これからの戦いに期待しながら。

そう、私達はミラクルズ。

点を獲るのは可憐でも、指揮をするのは大地でも、ここに居るみんなで、いや、サポーターもみんなと一緒に、試合を、戦う。

サッカーを、する。

これ以上なく心強い仲間に関まれながら、その仲間達が笑い合うのを楽しみながら、可憐はそつと、絡めた腕の先にある手に触れた。

大きくて分厚い手。そのくせこんなとこまで綺麗な、優しそうな手。指を絡めた。

えい、握りしめる。

……握り返してくれた。

予想もしない、強い、強い力で。

うつむいて、組み合った指確かめて、瞳を上げて、横顔を見た。そこでこつちを見てくれるほど、甘い人じゃなかった。

太陽先輩は。

でもそれが、そのほろ苦さが、あたしには、ぴったり。

あたしは、そこが、好き。

ストライカーは走り出す。

まっすぐに、ゴールに向かって走り出す。

可憐はもう、迷わない。

背を押す仲間の想いを集め、背負う9番にゴールを誓う。

前しか向かない終わらぬ闘志で、光のシュートを撃ち放て。

どんなに敵が強くても、頼れるアイツがここにいる。

最後の最後に切る札切り札、

緑のピッチに咲くや此花、

可憐・ジ・「エース」・ストライカー！

Never Give Up, Go Ahead, and DO MIRACLES!

「A・C・E」

【あとがき】

ありがとうございます、ながたかずひさです。

実に2年半ぶりになる「ミラクルズ！」の新作です。お待ちいただいていた有難い皆様も、新しくお手に取っていただいた皆様も、いかがでしたでしょうか。

あまりに久しぶりなので、勘が戻らず苦労しました。ちゃんと「ミラクルズ！」つぼくなってるかどうか不安です（お前が言うな）

中身ですが、表紙やメンバー表を描くのにもエライ苦労しました。「ミラクルズ！」初のオフセット、気合いだけはいつもどおりびゅんびゅん空回りしております（泣）

さて可憐ちゃん。

描き終わってみれば、「もうちょいおバカ・エピソード入れた方がよかったか

な？」とかとか、欲は尽きません。描いてて気持ちいい、可愛い女の子です。

まつすぐ・ひたむき・いっしょうけんめい。

簡単なことなのに、何より難しいことですね。

それを何事もなくやってのける可憐、見習いたいです。

えと、ちなみに。作中のドーナツ・シヨップはもちろん皆さんご想像のあのお店がモデルなのですが、一年生それぞれのマイ・フェイバリットは……

可憐……オールドファツション　　ありす……フレンチクルーラー

古都……エンゼルクリーム　　千里……チョコレート

エレ……ハニーデ IPP　　明日葉……ポン・デ・黒ごま

とこんな感じです。こーゆーのかんがえてるときがいちばんたのしいれすよ

(泣)

エース・ストライカーは駆け抜けます。

フィールドを、青春を。

まだまだ、これからが、本番です。

Webでは、「ミラクルズ！」の他の作品がお読みいただけます！ 詳しい設定資料などもございますので、ぜひ一度、ご覧ください。

「Mimolete」 Web

<http://raken.net/>

ご意見・ご感想などございましたら、お気軽にお声おかけください。

[nagata@mti.biglobe.ne.jp](mailto:nagata@mti.biglobe.ne.jp) です。 よろしく願います。

最後にもう一度。

お読みいただきまして、まことにありがとうございます！

二〇〇二年一月  
ながたかずひさ

# :D Mimolette

Miracles! Episode 9 [no.6] - A.C.E -  
Powered by Kazuhisa Nagata  
web: <http://rakken.net/>  
mail: [nagata@mti.biglobe.ne.jp](mailto:nagata@mti.biglobe.ne.jp)  
TwitterID: KazuhisaNagata  
2003.10